

---

# 無辺の鳥かごで

Lotus

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無辺の鳥かご

### 【ZPDF】

Z5311D

### 【作者名】

Lotus

### 【あらすじ】

Warning: There is not an exit.

この世界から消え去る為に私はここにやつて来た。なのに、私の予測は、希望は全く見当違いいもいとこ。また、生きる羽田になる私。（全5話）

### プロローグ

こんな筈じゃなかつた。あのイヤでイヤでしじうがなかつた毎日を、自分の人生において最大の勇氣と決断でもつてピリオドを打つたあの日から、私は楽に 本当はもつと凄く頭のいい感じに聞こえるうまい表現があるんだうけれど なる筈だった。けど、これは何？ ここは何よ？ どうしてまだここに居なくちゃいけないの？ これつてもしかして最悪パターン……つて、違う！ そんな訳無い！ あんなゴミみたいな人生なんかよりすっげくマシに決まつてる！

あの時、私は今まで経験した事無い程ハイテンションだった。いや多分、他人が見てもそれには気付かなかつたと思つ。だって体は静止状態だつたし。でもちよつとは震えるくらいしてたかも。家の、自分の部屋で、椅子に座つて。何も書いてない真つ白なノート広げて、勉強するみたいに、でもそれは見てなくて。少し震えて、でも頭の中はきつと脳ミソが、あの、何だつける？ 寝てる時に眼球がガーッと動くあれ。あれの数倍の動きをしていたと思う。グルグルと。多分、怪しいクスリをやつたらあんな感じなんじゃないかと思つ。で、ずっと妄想にふけつてた。

絶対絶命のピンチに陥つたら私の中に眠つてゐる超能力が覚醒する。私は強くなる。何を言われてもへこたれない精神力。あんな痛みをものともしない身体。凄い！ 凄いよ私！ それが手に入るかも知れないじゃない！ 漫画の世界？ フン、もしそうなつたらきつと

誰もが私を、私の力を漫画に描きたいって言つてくるに違ひないの。映画化とかさ。手に入れたら宝くじの一等が当たつた様なものよ。もっと凄いけど。

はずれたら それでも私は全然構わない。だつて、その瞬間私はこのイヤな世界から消えるんだもの。絶対、絶命のピンチなんだから。

あれからもうすぐ一ヶ月。私の目の前には、代わり映えのしない街の風景が広がつてゐる。ほんとは建物とか「こちやこちやした街で全然広がつてゐるって感じじゃないんだけど。」この一ヶ月近く、毎日同じ風景を見る。もう飽きたんだけど、でもここにいなきや、つて感じがするから、今日も。『今日』とか、変だな。『今』も。私はずーっと、ずーっと、ここに立つてゐる。夜になつたら帰つて寝るとか、もう私には関係の無い話。一時間立ち続けたから十五分休憩とか無いし。『じゃあ、何で?』とか聞かれると思う。それは私が教えて欲しい事。ほんと、教えて欲しい。ていうか、もう命令して。あれやれ、これやれって。二十四時間一ヶ月近くぶつ通しで同じ場所に立つよりも辛い事なんてある訳が……。

いや ある。あつた。そうだ……あんな想いはもうしなくていいんだもんね……。まだ、マシか……。

私に命令どころか、話しかける人なんて居ない。第一、もうこの場所には誰も近付きたがらない……。

私はあの妄想の直後、真つ直ぐこの場所へ來た、と思つ。で、その後はどこにも行つてない。最初の数日ここには普通に人が來てた。朝になつたら通勤するおじさんとか学校行く小学生やら中学生が高校生が分からぬ制服の子達が。それだけじゃないけど。昼は買い物でも行くのか自転車にのつた主婦みたいな人とか。夕方は帰つて来る人。いっぱい居た。でもさすがに夜は……太陽が完全に沈んで真つ暗になる頃にはもうまばら。でもそれも数日だけ。夜には完全

に人が途絶えた。だつて、ここには私が居るから。

凄くおかしく思えた。私は朝も昼も、明るい間もずっと居るのに。私は真っ直ぐ向かつて歩いてくるおばさんとかをじつと睨みつけたりしてゐるのに。明るいうちは私が見えてない。完全無視。時には事もあろうに私の身体に重なつてくる変な男まで居る。幾人もの男が私を通り過ぎていくゴーヨゴーヨみたいな詞があつたつて。確かにあの男どもは何も感じないらしく通り過ぎていくけど。

どこか凄く田舎の村で村人総出のお祭りの日に朝からハイテンションなお子様達の様にワクワク……じゃないけどこの身に起こつた超革命的な出来事を境にかなり興奮気味だった私。でも、沸いていた私の血はわりと早くに治まつた。ていうか、血なんて私には無かつたんだ。

この身に起こつた云々ていうのは確かだけど、その『身』はもうここには無い。私の血は最初の日に無くなつてた。お揃いの作業服みたいなのを着たおじさん達が私の身体を全部かき集めて拾い上げて持つて行つちゃつたし、辺りを染めた私の血は綺麗さっぱり洗い流された。それを思い出したのは最初の日から数日後。

改めて思い起こせばその時、私は色んな感想をほぼ同時に持つた。後悔とは違う。でも似てるかもしない。まずは、何となくガツカリな感じ。だつて、身体が無くなつて全てが変わると期待してたのに、全てじゃなかつた。私の時間が、繋がつてゐる。『今』はあの辛い毎日の延長線上にある。もうあのイヤな出来事は起こらないとは思うけど、繋がつてゐるのがどこかイヤ。あと、期待。変化した部分もあるのだからこれから何かいい事が起きるかも知れない。どこか楽しい場所に神様か誰かが連れて行ってくれるかも。身体を無くす前はすぐにその場所へ案内してもらえる事を切望してたんだけど、どうやらまだみたいだから、こればかりはどうしようもない。で、とりあえずはどうにもこうにもなりそうに無いし、その時に言えた事は、

(私はもう、生きていらないんだなあ)

声にはならなかつたけれど。

## 初めての『人』

ここには花がある。多分、一ヶ月程前のある日から。その前には無かつた筈。何度も通つてゐるけど見てないから。

今日の花は、新しい。一応女の子してきたのに花の名前に疎くてよく分からんんだけど、なんだか可愛らしい花が多いかな？ 可愛くない花なんて無い！ とかいう人居そうだけど、ほら、お葬式で献花するやつとか地味のあるでしょ？ ああいうのじゃないやつ。で、こここの花はどこかのおばあちゃんが置いていく。新しいのに変えるのは毎日じゃないんだけど、おばあちゃんは毎日ここに来てこの花を眺めてから、通り過ぎていく。杖をついてゆっくり歩いて行くから、なにカリハビリみたいなのかな？ これまた分からないけど。

この花は、私に、だ。かなりの確率で。他に理由なんて見当たらぬ。私の事はきっとこの周辺の人なら知つてゐる筈。新聞とか多分載つただらうし、テレビだつて。私に、お供え。

今日の午前中、おばあちゃんは新しい花を持つてここに来た。いつも様に花を取り替えて、おばあちゃんは手を合わせたりしないけどやつぱり今日もじつと花を見つめて無言だつた。私はきまつておばあちゃんの隣にしゃがんで、一緒に花を見る。おばあちゃんの正面に立つべきか？ とか考えたけど、花は電柱とガードレールの間にあつて奥は「ミニ」だらけの小さな草むらだし、おばあちゃんは花を挟んで電柱を向いてるわけ。電柱とおばあちゃんの間はとても入る隙間は無いし、電柱の後ろじやあ、変でしょさすがに。

だから、隣で見る。肩があつたら触れるくらい近くで。でもおばあ

ちゃんはずつと真顔でこれといった表情が無い、みたいな感じ。

おばあちゃんは知らない人。記憶はない。でも、どつちかと言つと、好き、かな？ だつて毎日来てくれる。昼間ならまだここを通り人は居るけど、立ち止まる人はそう居ない。私がここに来て最初の頃、私と同じクラスの子とかが親と一緒に来た。で、何か拌んで帰つて行つた。それから見てない。ずっと来てくれるのはおばあちゃんだけ。私を知つたのかな？ わからない。

おばあちゃんと話せないかな。

夜になつて人の気配が無くなつた。遠くに見える明るいコンビニの前を歩く人の姿が小さく見える程度。一人の夜は長い。寝ればすぐ朝なのに、どうも私は寝られなくなつたみたい。休める身体がもう無いからかな？ 辺りを改めて見回したら、溜息が出た。テレビや映画やその他諸々で見たり聞いたりした幽霊話を思い出す。夜な夜な近付く人間を怯えさせる悪霊達！ 私は悪霊じやないわ。全然。でも、やる気満々な悪霊達もお客様が来なけりや食いつぱぐれだねえ……。いわゆる『やれやれ』ポーズで首を竦める真似をしてみる。

ん……？

「あの、ちょっと？ 今いいですか？」

「うわっ！ 人だ！ 人に見られた！ え！？ 何を？ 誰！？ ちよつ……」

「落ち着いて下さい。あの、驚かせてしまつてしまつてすいません。つて、落ち着いて！」

「何！？ 私が見える！？ 子供！？ 男子！？ うわ何！？」

「分かりました。待ちます。じつとしてここで待ちますから、落ち着きましょう」

「男子が！ 男子が！ 私をじつと見るーー！」

そりやもう並みの驚きじやなかつた。特上でも物足りないくらい。でもその男子、男の子がほんとにじつとして見てるもんだから私は大急ぎで言葉を探した。だつて、知らない男の子が急に現れて沈黙

のままずっと居るなんて、普通じゃない！ 何か、何か会話して自然な感じで……。

「「めんなさい。そんなにびっくりされたると思わなかつたから」私のあたふた感が治まってきたの感じ取つたのか 治まつてないけど 男の子が言つた。

「えと、あの、私が見える……？」

変な質問をしてしまつた。この子がまつとうな人間なら何も無い暗がりに話しかけたりしない筈。

「もちろん見えますよ。僕だけじゃなく他の誰もが見てると思います」

え？ え？ 見られてる？ 大急ぎで周りを見回す私。

「いや、今は誰もいませんけど」

……紛らわしいこと言わないでよ。

「見えるから、夜は誰もここに来ないんですよ

「あ、そうか……」

おっ、会話が成立したかな？ これでなんとか普通に「//」モードケーションが。

「僕には昼でもあなたが見えるんです」

……。思い出せ、思い出せ私！ 昼間何か変な事してないよね私！

「あなたがそうなるようにしてるんですけどね」

男の子はそう言うと細長い右手の中指を顔の前に持つて言って、ついでメガネのフレームを僅かに上げた。

男の子は「」く普通のジーンズに「」く普通の白いTシャツ。細いなあ。背は私よりちょっと高いかな？ 歳近そう。髪は……暗くてよく見えないけど黒で、なんというかクリンクリンとハネてるな。メガネは銀のフレームで上下の幅が細いやつ。レンズ光つてる。かなり汚れを気にしないとそこまで綺麗に光らない。私もちょっと今までメガネだったから分かる。今はコンタクトだけど。ん？今は違うか。でも何でこんなはつきり見えてるんだろう？ ド近眼だったのに。つて、そりやそうだよね。その出来の悪い劣等生は一人揃つ

て居なくなつたんだし。えーと、何の話だつたっけ？

「あなたの事はある程度知つてゐつもりです。新聞でも読みましたし」

「あ、やつぱ新聞、載つたんだ……」

「佐藤明子さん。今年、十八歳になる筈だつた」

「……私の事調べて何するつもりなのよ？」

「どうして？」

「この近所の人はみんな知つてゐると思います。だつて、あなたが住んでた町ですから」

私という人間が居る それだけでしょ。新聞で知つたの方が多い筈だわ。どんな毎日を過ごしてたのかも。

「僕は、杉田義雄つていいます」

「……どうも」

とりあえず会釈したつもり。ほんとにちゃんと見えてるんでしょう  
ね？ この子幾つかな？ 質問してみようかな。

「あの、聞いてもいいですか？」歳

年齢は重要。これによつてこの男の子とどう接していくべきかを決定する。私が。

「んー、僕の歳は……」

ん？ サバ読むつもりじゃないでしょ？

「十……五、歳」

何？ 今の間。

「本当に？」

「ええ。あなたの二つ下ですね」

「今年、十五になるの？」

「……えつと、もう誕生日過ぎましたし、十五ですよ」

「じゃあ、違う。三つ下よ」

フツ、いくら背伸びしたつてそれが厳然とした事実なのよー・まだ中学生じゃない。

「でも、あなたは、十八にはならないでしょ？」

杉田君とかい「こ」の男の子は妙に大人びたというか、変な感じ。なんだか、『何でも知っていますよフツフツフ』とか今にも言い出しそう。まあいいわ。何でも知ってるなら教えて頂戴。で……この杉田君は何しに来たんだっけ？

「何か……言つてたよね？ あの……私に何か用事とか？」用事つて。自分で言つといでなんだけど、用事つて。この子は私がもう人間じゃないつて知つてゐるのに何の用事よつ！

「あー、何て言つたら……。気になつたといつか……」

「私が？」

そりや気になるわよね。見えてたなら。でも普通話しかけないでしょ。取り憑かれたらどうしようとか考へるんじゃないの？

「あなたをずっと見てて、ちょっと様子が変だな、と」

「変……かな？」

「ええ、まあ。あなたは、あの名前で呼んでもいいですかね？」あー、明子さん、とか

え！ いきなり下の名前？ ちょっとそれは早過ぎないか少年！

「イヤですか？」

「えーと……佐藤で」

「わかりました。佐藤さん」

……残念がるとかはしないのね。

「佐藤さん、ずっとここに居ますよね。ここに来た日から、ひと月近く。で、ただ立つてゐるだけ。普通の表情で。普通の格好で」

普通でいいじゃないの。何か悪い？

「どうしてだらうと思つたんです。ここにじだわる何かがあるのかな？」

「別に……何も無いけど」

「何も無いのに面ちやいけないとは言いませんけど、本当に何も無いなら驚きです。あ、いや、……そうだ。佐藤さん、この世界に未練があるとか、恨んでいる人や物あります？」

物に恨む？ どう恨むの？ ちょっと電車！ 痛いじゃないの！ とか？ 違うか。でも、そうだよね。私が今もここに居るのって、天国に行けないのって、未練や恨みを残して居るからって事になるよね。

変だな……確かに憎い人が何人もいる。この世界で楽しく生きたかった。でも、あの憎たらしい顔なんてもう見たくない。関わりたくない。遠くへ行きたいって願ったのに、この世界はもういいと思つたのに、何でここに居るんだろう？ どうして空から光が降つてきて私は浮き上がらないんだろう？ 神様は私をほつたらかしにして何してるんだろう？

「佐藤さんがここで不慮の事故に遭つたというなら、何となく分かれます。でも、……そうじゃない。だから不思議に思つたんです。ここに居続けるのを」

「聞かれてても私にも分からぬよ。……」

沈黙。彼、杉田君は何か考えている様にも見えるけど、これを聞いてどうするつもりだつたんだろう？ はつ、もしかして靈能力者！ ？ 私を救いに来た！ ？ 十五歳！ ？ ……なんて、何考えてるんだろう私。そんな馬鹿馬鹿しい。

「佐藤さんつて、面白いですね」

「は？」

「だつて、全然恨めしそうにしてないし」

杉田君は笑つた様だつた。よく分からぬけど脣の端つこが上がつたから。

「不思議です。どうして……」

どうして……生きのを辞めたのか、だろうな。多分。もつと悲愴感漂う雰囲氣で居るのが常識というものかな？

自分でも正直驚いてた。この杉田君が初めて会話をした人なんだけど、話してみてはつきりと実感した。私、あの日以前と全然違う。喋り方はそんなに変わつてないかもだけど、なんていうか、頭の中ではポンポンと言葉が浮かんでくる。ちょっとハイな感じ。どうし

てかな？ 私つて昔は頭も結構動きが鈍かつた 成績は悪くなかつたけど良くもなかつた と思う。うん。これは私も不思議。

「急にこんな事言つて失礼だとは思いますが」

杉田君なんだかサワヤカ笑顔。暗がりで。

「佐藤さんが気になつて仕方ないんです。また、会いに来てもいいですか？」

「告白？ 人ではない何かに告白ですか？ もしかしてヤバイ人？ いやいや、最初からヤバイ人決定でしょ。

「まだ当分ここに居ますよね？ イヤですか？」

「いえ……いいんですけど……」

「良かつた。じゃあまた来ます。あ、僕の事は『よつしー』と呼んで下さい。聞き慣れたあだ名なんです」

よつしー？ 義雄のよつしー？ 会つたばかりの私にそう呼べと？  
君にはうの氣が？

「それじゃ

よ、よつしーはぐるりと回れ右をしてキザな感じで持ち上げた手をヒラヒラと振つてここから立ち去つた。

あの子、よつしーの家は近いんだろうか？ よく見かけた、みたいな事を言つてたしこの辺をいつも通つてるのかな？ 私は今居る道のちよつと先にある公園に立つてゐる時計を見た。照明付き。今は夜の十一時前か。十五歳……受験は？ 勉強は？ あ、塾……でもないか。何も持つてなかつたもんね。でもあの話し方といい、受験とか学校とかそういうの全然似合わない子だつたなあ。よつしーは。

「はあ。私は溜息をついて、そのまま長時間 普通の人の『長時間』より遙かに長い時間 固まつた。

まだ陽が昇る前だつた。暗いけど、私は氣付いた。あれは……おばあちゃん? 何故こんな時間に? うん。どうみてもあのおばあちゃん。ずっと先のコンビニの前の通りで立ち止まつてゐる。何してゐるのかな? まだ暗いし危ないよ。じつと皿を凝りうす。

私は思わず顔を出しちゃった。おばあちゃんは じつを見てる!

何で？ 何で？ あんな所で立ち止まって、真っ直ぐこっちを、真っ暗なここを向いてる！ 身体が！ 無いけど身体が強張る！ 顔が動かない。目が逸らせない。はつきりと見えるほど近くじゃないけど、おばあちゃんは私を 確実に見てる。

お、落ち着くのよ、この距離でお年寄りに見える訳がないや、まつて。老眼つて遠ければ遠いほど見えるんだつけ？ 何言つてゐるの違つでしょ！ 望遠鏡じやないんだから！

また私は声を出しつづけ反ひこしまつた。おばあちゃんが、歩き出  
した！

(二) 来ないで、来ないで！

私は田をぎゅっと閉じて念じる。来ないで、来ないで！　あ、やつぱりダメよ！　田を開いた時直前に迫つてたらどうするの！？逃げなきや！　そう思つて私は勢い良く田を開けた。

おばあちゃんは、居た。通りにある角を曲がって、私のいるこの場所とは反対の方向へ、ゆっくりと杖をついて去っていく所だった。

私の人生はもつと、じゃなくて 早鐘を打つていただろう。おばあちゃんは完全に見えなくなつた。なんとか落ち着きを取り戻した私は、何だか嫌な気分になつてしまつた。あの優しそうなおばあ

ちゃんに私は何て……。私の方が得体の知れない存在の癖に。おばあちゃんは何か用があつてこんな早くに家を出て来て、毎日通りにちをふと眺めただけよ。きっと。それ以外何がある訳？ どうかしてた、私。あ……。

私は忙しく考えを出したり引っ込んだりして。私は夜は人から見える。だから人が来なくなつた。あの、よつしーもそう言った。今は……。また振り返る。公園の時計は 午前四時四十分。普通に考えて、まだ夜じゃないの？ ジャあおばあちゃんに私は見えた？ 見えてたとしたら、どう思つたんだろう？ 普通、怖いよね。私が居る事の方が怖いよね。おばあちゃんと私じゃあ……。明け方前の四時台にお年寄りが散歩するのも、うん、ちょっと怖いけど。おばあちゃん、今日も来るかな？ もし来なかつたら……私の方がびつくりさせちゃつたんだろうな……。そんな様子は無かつたけど……。

朝からずつとただ一点だけを見つめて過ごした。いつもあるおばあちゃんが姿を現す通りの角。大勢の人がそこから出て来たけど、おばあちゃんは……来ない。もつお昼前……来ないのかな？ もう、一度と？

凄く、凄く寂しくなつた。悲しいよ……。あの優しそうな、うつん違うよ。花をずっとここに持つて来てくれる優しいおばあちゃん。そんなおばあちゃんにすら声も掛けられない。ただ怖がらせるだけの私。

嫌がられるだけの私 。

それが嫌だつたのに！  
それから逃げる為にここに来たのに！  
どうして迎えに来ないのよ！  
ここまで待たせるの！

私はここに居たくないのっ！  
早く私をっ！

私を消しなさい！！

この感覚。涙だ。凄く、リアルな感覚。不思議だな。今私は本当に、物質的な肉体が無いというだけで、感覚は全てあるんだよね……。今までと全く同じ様に。変われて無いんだ、私は。多分もう机の角に足の小指をぶつけて悶絶する事は無いだろうけど、ほんと、そんなちっぽけな違いが生まれただけ。逃げ出す事も……出来て無いんだ。

涙が頬を濡らしてる。鼻水、拭く必要無いね。忙しそうに前を通り過ぎていく人達を無視して私は、ぽろぽろと、だらだらと、泣いた。

また夜が来て、まだここに居て。私は何すればいいんだろう？  
ここに来たら何もかもが終わると信じて、来てみたら違った。じゃあ、次は？ 何か手が残ってる？ 無いよ。最後の最後、大事に仕舞つていた奥の手で、『どうだあつ！』とやつてみたら、スカたつて事。物凄い重大な決心だったのに。人生で一番勇気を出したのに。それに見合つ結果がこれつぽつちも無いなんて理不尽よ。神様の怠慢だわ……。はあ……よつしー来ないかな？

普通、人には毎日色々な出来事があつて、その中には楽しい事も幾つかはある訳だけど、私には出来事と呼べる事が殆ど無い。自分から動く事が無いし。だから今はおばあちゃんが来る事と、昨日不意に現れた杉田君、よつしーに会つ事、この二つが、たつた二つが私の日常に起こる出来事。おばあちゃんが来てくれたら、嬉しい。間違いない。よつしーは……まだ会つたばかりだけど、多分この先貴重な知り合いになると思う。良く分かんない子だけね。この二つってどちらも楽しみ。だから、つまり今の私の生活は幸福度10

0%な訳。強引といつよつ無茶苦茶だけど、そういう事になるのかなあ？ つむ。……このままおばあちゃん来なくなつたら、私の幸福度がいきなり半減。急落？ 暴落つていつの？

（あ……、あれ？）

ほんやりと「ンビニの明かりに田を向けたら、人影。あそこに居るの、おばあちゃん？ おばあちゃんだ！ おばあちゃんが来てくれるた！ 間違いない！ 昨日の、じやなくて今朝のあの場所におばあちゃんが居る！

（おばあちゃん！）

私は心中で思いつきり呼び掛ける。全然、驚いたりなんかしない。あの時は私がどうかしてたんだもん。せつといつにも増して馬鹿だつたんだ。

そんな事考えながら、時間が過ぎていぐ。おばあちゃんはいつかを見てる。私を見る。けび、ここへ来てくれる筈も無い。それに……夜。私は、恐怖の対象になる。でも、また来てくれたって事は、……会いに、いや、見に来てくれた？ おばあちゃんは、驚いてるとかそんな感じじやない。手を胸の辺りに持つていって、ただ、こつちを……。

（あ……）

おばあちゃんが歩き出す。また、今朝と同じ様に、角を曲がつて……。

おばあちゃんの姿が見えなくなつて、一気に私の動悸は鎮まつた。おばあちゃん、また会いたいよ……。話してみたい。

「こんばんわ」

「わあっ！」

「あれもしかして見えてませんでした？ あの通りからいつに入つてきて佐藤さんに向かつて真正面を歩いてたのに、思い切り脅かしといつて笑う男、よつしー。思ひ切り脅かしといつて笑う男、よつしー。

「あらためまして、こんばんわ」

「……どうも」「さも」

ぶつきらばうに返してみる。この子、また来るとは言つてたけど、まさか次の日来るとは。いいんだけどね。別に。

「今日は、どうでした？」

「は？」

「何か、面白いものでも見ましたか？」

「……全然」

この子はこんな会話を友達ともするのかな？ 変だぞ、君。

「あなた、こんな時間に出てきて親とかは」

「ああ、全く平氣です。えつと、僕の事は『よつしー』と呼んで

」

「昨日聞いた」

「じゃあ、よろしく」

よつしーはニヤツと笑う。おまけにメガネもキラツと光る。分かりましたよ。

「さつき、佐藤さんを見る人が居ましたよね？ 驚きです」

「え？ 見てたの？」

「ええまあ。佐藤さんあの人、知つてます？」

「……知らない。あ、でも知つてる。ここにね、花を……持つてきてくれるの」

「なるほど……。気になるなあ」

「何が？」

「あのお婆さん」

……君は何でも気になるのかね？ 昨日は『私を』気になると言つた様な。

「お婆さん、見えてますね。完全に。でも怖がつてなかつた」

「そんな事、分からぬでしょ」

「いえ、怖がつてません」

よつしーはキッパリと言い切つた。

「不安、ちょっと違うかな？ 佐藤さんを見て思い詰めてるという

か……」

「そんな事……何でかな?」

「ああ? あのお婆さん、佐藤さんの事は知らないのに花を供えてくれるなんて、優しい人ですよね」

「……うん」

「まあ、佐藤さんが知らないからって向こうも知らないことは限りませんけど」

「……」

「お婆さん、さつと佐藤さんこぶつてみたいなんじゃないかなあ……」

「え?」

「よつしーの言葉に驚いた。私に会いたい……って、何で? 花を持つてるのは、眞ですね?」

「うん。昨日までは毎日ここを歩いてたの。運動の為、みたいな。その途中にここに花を見て行くんだけど、時々新しい花に変えてくれる」

「今日は?」

「今日は……ここは来てない

「で、夜に來たと」

「あのね、おばあちゃん、昨日、じゃなくて今朝のまだ暗い時間にも来たの。やつと同じみじて帰つて行つたんだけど」

「暗い時に、一度ですか……。この近所ではもう佐藤さんの事は知れ渡つてます。その……、『夜に居る』っては……、だから眞も居るんだって」

「お婆さんはやっぱり、佐藤さんに会いたいんですね

次の日、こや、よつしーが帰つて行つてからずっとと考えてた。おばあちゃん、どうして私に会いたいんだろ? 知らない私に。一ヶ月もそのままつて 全然さまよつてないし、もう定住しちゃつてるんだけど 未だここに居る私を心配してくれてるのかな? ここに居るだけで悪い事しちゃつてるのかな? ……?

つと……。よつしーだ。まだ昼間で明るいけど、何だろ？

「佐藤さん、ちょっとこっちへ」

「え？」

よつしーは私の真横まで来て少しだけ立ち止まって小声で言つて。

「ど、どこに……私は……」

「いや、すぐそこですよ。あの公園の近くくらいならいいでしょ？」

公園。私が延々と立ち続けているこの場所から数十メートル。……行つた事無い。たつたあれだけの距離なんだけど、私は行つた事が無い。何故かと言つて、上手く言えないけどほら、私みたいな状態の人、つて、ん？ 人かな？ とにかくちょっとその辺をぶらぶらみたいな事はしないものでしょ。多分。だから、行つてない。すぐ

その公園。

「すぐ済みますから。僕、今から独り言を喋る訳ですから、ここは人に見られやすいし変でしょ？」

そうだ。他人にはよつしーは見えるけど私は見えない。ここで会話するとよつしーは変な子、いや、基本がそうみたいだからもつと変な子に見られてしまう。

「うん……分かつた」

よつしーが足を止めたのは公園の周りに植えてある大きな木、何の木かは分からぬけど、その近くだった。ここならいいの？ いつもみたいにメガネを光らせてニヤついたら即、不審人物だけど……。

「佐藤さん。たぶんあのお婆さん、また夜に来ると思ひます」

「……どうかな？」

「まあ、絶対ではありませんけど。でもその可能性が高い。それでですね。佐藤さんは、あのお婆さんに会つてもいいと思いますか？」

「え？ えーと……あのおばあちゃんは毎日来ててくれてたし、話が

出来たらうれしいかなあ、とか……」

「来るなら多分、今夜もでしょ。諦めてないなら」

「そんなの分からぬによ。体調とか、他の、都合が

「やつですね。まあとにかく。おばあさんがまたあの『ハビーム』できて佐藤さんを見ている様なら、僕が連れてきます。どうでしよう？」

「どう、どうでしょ、うつて、何でそんな事を？ それに一昨日は早朝で昨日は、えーと、宵の口つて言つんだっけ？ おばあちゃん何時に来るかも分からぬのに一晩中見てる訳にいかないでしょ」

「いや、その辺は上手くやりますから」

……『上手く』って、何？

「佐藤さんは、僕とお婆さんが来たら、『ぐく普通に、今みたいに普通に話しかけて下さい。笑顔なんかあつたらいいかな？ それだけでもらえれば、大丈夫ですよ』

「……声、聞こえるのかな？」

「姿が見えるという事は、今の僕と同じです。ちゃんと聞こえます。それに、佐藤さんに『話したい』といつ想いがあるんだから、心配要りません。届きますよ」

本当に十五歳か？ よつしー……。

「じゃ、そういうことで。勿論、今夜じゃない可能性もありますからそのつもりで」

そのつもりも何も、私には他に手の離せない用事がある訳でもないし、じつといつものようにしてるだけ。

よつしーは少し昂足でさつき来た道を戻つていつた。今からどこへ行くんだろう？ 今日、平日。学校は？ ん？ まさか登校拒否とか？ 違うか。普通そういうのつて出歩かないよね？ じゃあ、不良！？ これも違うっぽいなあ。……不思議な子。はつ！？ もしかしてオカルト研究会とか入つてたりして！ あのメガネの光り具合とかそれっぽい！

……さてと。夜になつたらまた来てくれるかな？ おばあちゃん。もし来てくれたら、何て言おう？ 花のお礼言つとかないとね。う……今から緊張する。

「コンビニ。辺りが暗くなつてその明かりが目立ち始めた。あそこの人、嫌だうなあ、こここの近くで。最近は物騒だからコンビニ強盗とかにもビクビクしなきやいけない上に、『出る』と噂のこの私。いつか挨拶にでも行つておけば、『ああ、いつもの人が』ってならないかな？ はは……。

時間は夜の……八時過ぎ。私達には早い時間だけど、あのおばあちゃんにはやつぱり……家の人もさすがに三日連続夜の外出は見咎めるんじや、あ、

（おばあちゃん……）

やつぱり今日も 来てくれたんだ。おばあちゃんがコンビニの明かりの中に、来てくれた。

（おばあちゃん、私、会いたいよ。話したい）

おばあちゃんもそう思つてくれてるのかな？ だとしたら、すぐ嬉しい。まだ聞いてもいのにちょっと笑みを浮かべてしまつた私。……そうだ。よつしー、本当に居るのかな？ つて、うわっ！

本当に出た！ よつしー！

よつしーが今、おばあちゃんに話し掛けた。一体、何て言つて声を掛けたんだろ？ よつしー、上手くやつてよ？ ……おばあちゃんの腰が引けてる。確かにあれは、引くよね。よつしーがまだあどけない愛らしい少年だつたらもうちょっと違つたろうけど、残念ながら……。あ、どうかな？ 今、一人揃つてこつち見た。……手とか振るべき？ いやいや、止めとこつ。それはちょっと、変だ。大人しく待つてよう。

ちょっとと長く話してたみたいだつたけど、ようやくよつしーはおばあちゃんを説得、じゃなくて、んー、多分、おばあちゃんの不安を取り除いてくれたのかな？ 何を言つたらそんな事出来るのか分からぬけど、一人寄り添つよつにしてこつちに向かつてゆつくり歩き出した。

あー、緊張する！ 私にとつて一人目の人の、言葉を交わす、二人目の。ちゃんと、話せますように。。

心臓があつた辺りがバクバクと音を立てて、ちゅうと足が震えちゃってるかも。普通この状態なら私とおばあちゃん、逆だよね。おばあちゃん、心臓大丈夫かな？ よつしーがおばあちゃんを半ば抱きかかえる様に支えて、私から少し離れてる場所で一度止まった。よつしーがずっと何かをおばあちゃんに言つてる。おばあちゃんを勇気づけてくれてるのかな？ おばあちゃんは、そんなに怯えてる訳でも無いみたい。私と、初めて田が合つた。

「あ、あの」

え、笑顔、笑顔で……。

「こんばんわ。お、おばあちゃんおばあちゃんは私の言葉を聞くと、一瞬びっくりしたみたいだったけど、その顔に、ゆつくり、ゆつくりと、優しい微笑みが広がつていった。

「こんばんわ。やつと、会えましたね」

「おばあちゃん……」

涙が溢れ出る。嬉しい、嬉しいよー！ おばあちゃん！

「なかなか、勇気が出なくてね……」

「おばあちゃん、ありがとうーー 来てくれて……私、凄く嬉しい……嬉しいよー……」

嗚咽が邪魔するおかげで言葉の最後の方は完全に声がひつくり返つてゐる。おばあちゃんも田に涙を浮かべてゐる。そうだよね。凄く怖い筈だもん。いくら私が普通にしたって、怖くて近寄れないよね。ありがとう、おばあちゃん。

無意識の内に私はおばあちゃんの肩に手を伸ばした。伸ばしたんだけど、私の手はおばあちゃんの肩を素通りしちゃって、びっくりしたけどおばあちゃんに気付かれない様に直ぐに手を戻した。

「花……いつもありがとう、おばあちゃん」

「やつぱり見ててくれたのね……今度、また新しいのを持つてくるから……」

「……うん」

ほんとは花つて高いだらうし結構頻繁に入れ替えてくれてるから結構な出費になつてゐる筈だとは思つんだけど、『ここに』とは言えなかつた。『めんね。

「私はもつ……田課にじちやつたもんだから。毎田、ここへ来て、あなたと花を見るのが。ちよつとさぼつちやつたけれどね」

「え？ ……私と？」

「だつて、あなたがここに居るつてこいつ尊は、ひと田前のあの田からすぐ、すぐに広まつたでしょ？ ここに来れば、あなたは居る。姿は見えなかつたけれど、きっとすぐ傍にいるんだらうつて、思つてたわ」

「おばあちゃん……」

「花を、あなたにあげよつて思つたの。供えよつて言つたら、何だか遠い所に行つてしまつた人に向けて弔意の証を立てて見せつて感じが私はするの。でも、ここに居るのなら

おばあちゃんはちよつと俯いて、でもすぐにパツと顔を上げて。笑つて。

「心が休まつたり、樂しんだり、ちよつと微笑んだり出来るように、綺麗な花を『差し上げよつ』つて思つたのよ。綺麗な花を、あなたにね」

「おばあちゃん、私、毎田おばあちゃんが来てくれて、それが、それだけが楽しみだつたの。きっとこれからも、だよ」

「ありがとう。私も嬉しいわ。そう言つて貰えて。ただ……、あなたがずっとここに居る事があなたにとって良い事なのかどうか、私には分からなけれど……」

「その辺はまあ、気にしなくていいんじゃないですか？」

突然よつしー、この柔らかーな空氣をメガネの鋭い光で切り裂いて乱入。ちよつとそれはひどいか。よつしーが居なかつたらおばあちゃんとこづして話せなかつたもんね。

「佐藤さんはここに縛られてる訳では無くて、自分の意思で居るん

です。何故かは僕にも理解出来ませんが、お婆さんも好きな時にこへ来れば佐藤さんが居る。きつともかへ、毎間でも見よつと思えば見えるんじやないかな?」

「佐藤さん、素敵なお友達ね」

おばあちゃんが不意にそんな事を言つ。素敵?『理解出来ない』と言つて放つこの子が?

「はは……」

「あなたにも、ありがとう」

おばあちゃんは、よつしーの方を向いて一寧に頭を下げた。

「あなたの言つたとおり、佐藤さんはとても素敵な可憐らしき女性ね」

うわ! 何言つてくわちゃつてんのよー よつしー なんて……

小つ恥ずかし……事を。

「あなた達に会えて本当に良かった……ありがとう」

「おばあちゃん……」

「じゃあ、そろそり……もう遅いですしそ、また今度にでも」  
よつしーがおばあちゃんに言つ。え、もう? まあ遅いけど。うん、  
またいつでも、おばあちゃんが元気な日には会えるよね。

「そうね。じゃあ、今日はこの辺で……。佐藤さん、またね」

「おばあちゃん、気を付けてね。また……」

おばあちゃんはにっこりと微笑んでゆつくつ振り返る。あらためて、  
上品なおばあちゃんだなあって思つ。私も、もじりに来なかつた  
「……なんてね。

「じゅう」

よつしーが軽く手を上げて私を見た。わたしは軽く頷いて見せる。  
(あつがとう。よつしー)

## 私は、何でじゅう?

おばあちゃんと話した次の日、最初何だか照れくさかつたんだ。何でかなあ？ おばあちゃんは新しい花 小さめの花束 を持つて来た。片方の手は杖持たなきやいけないから。私、普通に手を振っちゃつた。そしたらおばあちゃん、笑つてくれた。見えてるんだ、私が。ふと、よつしーの言葉を思い出した。

『佐藤さんに、話したい という想いがあるんだから、心配要りません。届きますよ』

……今の私は、おばあちゃんに会いたい、私を見て欲しい、知つて欲しい、つていう思いが強いのかな？ だから、こんな明るくても見えるのかな？

今日はおばあちゃん、いつもみたいにすぐ花を置くんじゃなくて、持つて来た花が良く見えるように、私に差し出した。おばあちゃん、つっても可愛い花だね。ありがとう。それからおばあちゃんはいつも場所にしゃがんで新しい花を古いのと交換した。私もいつものようにすぐ隣にしゃがんで。

「おばあちゃん」

私はそつと小声で、おばあちゃんにだけ聞こえる様に言つた。

「なに？」

「おばあちゃんは私を知つてたの？ 私が……ここに来る前に」

「ううん、あなたの事は知らなかつたわ。私はここの近くに住んでるから、あの日、すぐにあなたの事を人から聞いたの。そしたら……どうしてかしらね、『すぐ行かなければ』と思つたのよ」

「……そつなんだ」

「ええ……、どうしてかしらね」

一瞬、おばあちゃんの表情が曇つた感じに見えた。でもすぐおばあちゃんは明るい声をだした。

「さて、ちよつとおぼつてしまつたから今日からまた歩かないとね

言いながらゆっくり、杖に支えられながらおばあちゃんは立ち上がる。私は咄嗟に手を出して支えてあげようとした。でも、すぐに手を引っ込めてしまった。私では、おばあちゃんに触れられないから。よしーみたいにおばあちゃんの肩を持つてあげられない……。

「リハビリなの。私が鈍臭いものだから、転んで骨を折っちゃってね。足をね。ついでに腰まで痛めちゃって」

「え？ 大丈夫なの？」

「もう結構前なのよ。だからなるべく歩いたりして動かさないとダメだつて、お医者様に叱られてるわ」

おばあちゃんは『フフフ』って、これまた上品で、可愛らしい笑い声をもらした。カーワイイナー、ほんと。

「それじゃ、またね」

「うん。気を付けて」

そう、いつもの様に、おばあちゃんはゆっくりとここから遠ざかって行く。でも、今までとは全然違うんだ。だっておばあちゃんは、今までの知らない人じゃない。私の中でだけ、なんだけど、私のあはあちゃんだから。

それから一日が経った夜、私は人を待つた。待ち合わせも何もしてないんだけど、偶然来てくれないかな、と。いや、ちょっとイラしながら。

(何やつてんのかな、ちょっとくらい顔出しなさいよー)

変だとは思うけど。こういうのって、逆切れ？ 違うか。逆恨み？ 何で『逆』にこだわるんだ私。私に非なんてないわ。そして若干怒ってるわけ。……流行の言葉だとツンデ……？ うわああ！ わたしわなにおいつてるんだあ！ 却下！ 異却つ！

結局この日も来なかつた。で、次の日、私の不安とイライラが一層募る。夜のコンビニの明かりを見つめて。

(頼むから……来てよ)

そんな事を念じながら、待つ事数十分、一時間は越えてたかな？

(わっ、来た！ ょっしーだ！)

コンビニの前に人影。うん、間違いない、よっしーだ。……じつと見てるのは変だから、もつ少し近付いてから『あら？ ょっしー？』……うん。これでいいわ。

予想通り、よっしーはコンビニを離れて真っ直ぐ、レジカウンターへ向かつて来た。

「あ、あら？ よ、み？」

「何ですか？ 『あうみつ』って？」

「言つてないでしょー。」

「そうですか？」

「やけてる。ふん、何考えてるんだか。」

「あれからお婆さんは来ますか？」

「そうよ！ その話よ！」

「あ、あのせ、あの日の次の日は来たんだけど、その後おばあちゃんが来ないのよ！」

「そうなんですか？」

「うん……。夜も見てないよ。気になつひやつて……」

「うーん、まあ、お年寄りだし、毎日は大変だと思いますよ？ た

だ歩くだけのリハビリでも結構辛いらしいですね」

「うん、そうだよね……ん？ リハビリって知つてたの？」

私、よつしーに話したつけ？ 夜におばあちゃん連れて来てくれた時に聞いたのかな？

「いや……でもお年寄りが毎日同じ所を歩いてるなら多分、そういう事なんぢゃないですか？ 運動の為とか」

「うん」

「佐藤さん。僕、あのお婆さんの事ちょっと調べて、いや、調べるとか大袈裟な事ぢゃないんですけど、ちよつと聞いたんです

「え？ 何を？」

私は身を乗り出すよつしーに注目する。私、おばあちゃんの事は何も知らない。何だろ？

「あの、『JJI』で佐藤さんと言ひてこいものかどうか……」「何よ、言つてよー」

「その前に、佐藤さん。JJIを離れてどこかへ……あーこれもそんな大袈裟な事じやなくて、ちょっと行動範囲を広げてみようとか、思いません?」

「え? いや、思つた事、無いけど……」

「絶対イヤ、とかじやない?」

「……まあ、必要に迫られれば、大丈夫かも……知れない」「良かつた」

「何で? もしかして! おばあちゃんに何かあつたの!?」

「いえ、おばあちゃんには何も無いと思いますよ」

淡々と答えるよつしー。ああもつ! イライラする…

「教えてよー」

「じゃあ、言います。あのお婆ちゃん、一年程前に幼いお孫さんを亡くされます。JJI。JJIの場所で」

ちょっと沈黙して、私は思わず辺りを見回してた。JJIで? 亡くなつた?

「事故です。JJIでお孫さんは、轢かれた……」

「そんなん……」

人が、死んだ場所。その子が、自分の意思ではなく、他の『何か』に命を奪われた場所……。急に色々な事が頭に浮かんできて、混乱した。

(その子はどこへ? 私は一度も見てない。一年前だからもう居ないの? 私がここに来る前、何度も夜に通つたこの道。一度も、何も感じなかつた。怖くも無かつた。噂とかも聞いた事が無かつた。知らなかつた。びっくりして、身体が、はじけて、壊れて、悲しくて、悔しい思いをしたその子は、どこへ? ……おばあちゃんは? その子に会いたくて、JJIに?)

「すみません。イヤな話をして……。でも、確かにJJIはやつこいつ

場所だつたんですね

よつしーはそう言つて私の傍に、ほんの少し傍に寄つた。あ、そつか、よつしーは私を怖がらす事になるんじやないかつて思つた訳ね。人が死んで、出てきそうな場所に一ヶ月、何も知らずに、昼も夜も、ずっと居た私。

「…………ううん、私は大丈夫。だつてほら、私が怖がるもの変でしょ？」

「…………？」

よつしーは、私をじつと見つめてる。何か、顔に書いてあるかな？「おばあちゃん……、あの花は……」

「違います！…………お婆さん言つてたじやないですか。『ここに居る』佐藤さんに、花をあげようと思つた、つて。ここに居る間、ちよつとでも花を見て、微笑んだり出来るよつて」

……よつしー。あなた心が……読めるんだね。

「うん。ごめんね」

「佐藤さん」

よつしーは相変わらず落ち着いた声で、ちよつと力強く言つた。

「お婆さんに、会いに行きませんか？ 今度は、じつちから」

……私が？ おばあちゃんに会いに行く？

「ここまで歩いてくるのは結構大変ですけど、本当に寝込んでもい

ない限り、家の前くらいには出てくる事もあるんじやないですか？」

「でも、…………良く分からないけどもしかしたらおばあちゃん、この間私と話して、例えばよ？ その、亡くなつたお孫さんの事がずっと胸の奥にあつて、だからここに来続けてたとかだったら、何と言つうか……ごめん、整理できないよ」

「分かりますよ。言いたい事は。佐藤さんと話せた事で、ここに来続ける事を止める決心をした とこつ事ですよね？」

私は頷いた。

「でも、あのお婆さん、それでいきなりパツタリ来なくなるなんて、あるかなあ？」

「……新しい花に変えてくれたの。あと、リハビリだって話をして確かにもう最後、つて感じじゃなかつた。でも、帰つた後にそう思つたのかも知れないし……。

「でも、お婆さんの気持ちはともかく、佐藤さんはそれじゃ納得出来ないでしょ？」

「え？」

「言葉を交わしたのはほんの少しだけでも、急にサヨナラなんて、イヤでしょ？」

「でも、私がそんな事言つの……悪い氣がする。私はおばあちゃんに何もしてあげてない。ただここに突つ立つてるだけの……。死んじやつたお孫さんの事を何も教えてあげられないし……」

おばあちゃんから見れば、私とそのお孫さんは近い存在なのかもしれない。同じ様に、ここで。私がここに居る様に、お孫さんも居るんじやないかと思つてたのかな？ でも居ない。私には分からぬ。「まあ、勝手に色々想像しちゃいましたけど、その内にまた来られるかも知れません。でも、今度は佐藤さん、あなたの為に、会いに行きませんか？」

私の、為に？

「お婆さんが『もうイヤ』つてはつきりそう佐藤さんに伝えたのなら別ですけど、そんなのは佐藤さんとお婆さんの間では考えられないですよね？ そんな出来事も無いんだから。いずれお婆さんがお孫さんを完全に吹つ切る為に、来ない事にすると決めるとしても、佐藤さんはその心境をはつきりと理解出来るじゃないですか。だから、仮にそうなつたとしても、悲しい別れとは違う、もつと互いを想う優しい気持ちで、そうなれるんじやないかな。とまあ、思うんですよ。だから、話に行きましょう。もしかしたらお婆さん、そんな事とは全然別に、何か不安事を抱えてるのかも知れないし、とにかく聞かないと。佐藤さんもここで不安そうにくすぐつててるより、納得！ すつきり！ ですよ」

……よつしー、熱が入つてゐなあ。最後の方、ちよつと置み掛ける

感、ありありだよ？ もしかして、私を何とかここから連れ出そうとしてる？ 野外引きこもり中の私を。

でも、そうだよね。おばあちゃんは勇氣を出して、私に会いに来てくれた。今度は私が、勇氣を出せなきや。納得して、おばあちゃんと一緒に微笑んで、お互にがどうするのか、心に決める。分かった。分かったよ。よつしー。

私は初めて、この場所を離れる。これは変に緊張した。あの日以来の初めての行動。でもまだ良く知ってる街だから、マシかな。

午後。おばあちゃんが来なかつたその日の。よつしーと一緒にコンビニの前。うわー、何だろこの感覚は。男の子と一人で通りを歩くなんて！ うーん、新鮮だ。けど、ちょっと恥ずかしい気もする。あの、『よつしー』なのに。そのよつしーは時折、『この店のあれが好きだ』とか、『あそここの工事が中々終わらない』とか一人で喋つてる。うん、文字通り、一人で。そうだね。確かあそこの道路工事、何ヶ月も前からやつてたもんね。その継続が、私を少しブルーにする。

（変わらないなあ）

なんでも、よつしーの言つこはあのおばあちゃんの家を聞き込みで探し当てたらしい。なんとおばあちゃんは一人暮らししているそ уд、ちょっと離れた街に息子夫婦が居るんだつて。一人暮らししか……。そりや毎日の生活が大変だろうなあ。歩きに出られない事もきっとあるだろう。『ちょっと忙しかつただけよ』つていうおばあちゃんの言葉を期待してたり。

よつしーが、

「あそこですよ」

そう言つて指差したお家は、何とも立派な……ちゃんと手入れされた垣根に囲まれた 馬鹿でかいお屋敷ではないけど 綺麗なお家だった。

「ねえ、ここに住むおばあちゃんの事を聞いてまわつてたんでしょ

? 絶対怪しまれてるよ? 資産を狙つた泥棒か何かに  
「はは、そんな下手は真似はしませんよ」

「この子、一体どうこう環境で育つたんだ……?」

「じゃ、行きましょ」「う

よつしーがそう言つて普通に正面の門を通りて玄関に向かう。私も  
後ろに付いて。よつしーが呼び鈴を鳴らす。黙つて待つ。再び呼び  
鈴。再び黙つて。

「居ない?」

「さあ、出掛けてるんでしようか? ま、よくあることですね」  
あるいは床に伏せつて

「変な事言わないでよ! もう……」

「佐藤さん」

「ん?」

「入つてみませんか?」

「え? だつ、駄目よ! 勝手に……。それに鍵掛かってるんでし  
ょ?」

私は大きめの玄関にそびえるドアのノブに手を伸ばして、それをひ  
ねつてみる。うん。閉まつてる。

「出直そうよ」

「んーでもちよつと心配ですよね。お年寄りだから」

「あんたねえ! 怒るよ!…」

「どうしてですか? 実際、こんな風になつて大変な事態が起つて  
たなんて事は珍しくないでしょ? あのお婆さんは歩くのも楽で  
は無いし」

そりやそうだけど、何で? 何でよつしー、そんな事を言つんだろ  
う? 帰るのが普通じゃない。まるで、中の様子が分かつてるとで  
も?

「……入れないじゃない

「佐藤さんなら、入れます」

「は?」

「佐藤さんはこのドアを、通れます」

何言つてんの？ これを？ 私は手を伸ばしてドアの厚そつな板に触れる。それから掌をべたつとくつ付けた。ちょっと熱い。そこは陽が当たつてゐる場所だつたから。

「これを？」

私はよつしーに良く見えるよつしー、一、二、三回べたべたとドアを叩いた。

「お婆さんと初めて話した夜、肩に触れようとしましたよね？」

……見てたのか。あの時、おばあちゃんの肩に手を置こうとした。ほんとは抱きしめたかった。でも、その前に確かめないと。私は、人に触れられるのか、を。で、駄目だつた。

「佐藤さんの手はお婆さんの肩を素通りした。でも、このドアは触れる。何故ですかね？」

「それは……」

どうせもつともじらじい答えを用意してゐるんじよ？ よつしー。勿体ぶらないで言いなさいよ。聞いてあげるから。

「それは、そう決めてくるからですよ

「え？」

「佐藤さんが。自分は人と違う。いわゆる、幽靈なんだ、と思つてる。幽靈は人と触れ合えない、どこかで見たり聞いたりして、思ひ込んでる。まあテレビとか映画とかそういうので」

「そんなこと……、じゃ、じゃあこのドアは？ 幽靈つて壁とか平氣ですり抜けたりするじゃない。私はそう思つてた。今も……思つてるよ。なのに、これはどうこう事なのよ」

私はもう一度、ドアを数回叩いて見せる。

「んーその辺はちょっと難しいとこなんですけど……ほら、感情とか精神とか複雑でしょう？」

よつしーは、ついつとメガネの位置を直して、私を見る。

「そう。あなたは、ここを通り抜ける事が出来るんです。あなたは、幽靈だから

私は、なぜかショックを受けた。

あなたは幽霊だ。

そんな……。そんなこと今更……言わなくても。そんな分かりきつた事を、何も知らない子供に教えるみたいに、言わないでよ……。「その……そんな言葉で……私は幽霊って事に目覚めて、力を発揮するとも……？」

悲しい。悲しいよ。よつしーが、それを言うなんて。

「どうしてそんな事言つなのよ！」

私は叫んでたかも知れない。よつしーにだけ聞こえる声で言つたのか、それとも他の人にも聞こえる声だったのかは分からない。深く考える間も無く、私は、驚いた。

「僕は！ 僕ならあなたに触れられる！」

身体が、締め付けられる。ちょっと強く。でも、痛くない。よつしーが、私の、無い筈の身体を、抱いている。

「どうして……？」

「どうしてつて……？」

「よつしー？ ちょっと涙声かな？」

「あなたが……僕の事を他の人とは違つ そう、思つているから、だと思います」

他の人と違う？ どこが？ ……なんてね。……そうだね。よつしー、初めて私に声を掛けてくれた時から、もつ、私には、特別だったね。

「すいません。はは……」

よつしーがそつと私から離れて、頭を搔いている。

「まだ話さなきやならない事が沢山あるんです。その、佐藤さんこれからとか、考えなきやいけない事がいっぱいあるし、あ、これは、僕がそうしたいんです。えーととりあえず今は突っ込まないで下さい。ただ、あなたと一緒に色々考えたり、僕に出来る事が……。はは、何言つてんでしょう。ただ、佐藤さん、とりあえず今、

佐藤さんはどうこう状況なのか、考えてみませんか。……」このドアがどうとかは、直接的にはあまり関係無い事かも知れませんけど、佐藤さんの自分に対する認識とか、その辺から始める為の第一歩になると思うんです」

「……よつしー、難しい事言つね。でも何となく、ほやあんだけど、分かるよ。言いたい事。

「でも、教えてもらわないと、まだ何も分からなによ。……」

「このドアを通り抜けることは、凄く簡単だと思います。佐藤さんの認識ひとつですから。佐藤さん。僕と握手してもらえませんか？」

「え？」

「何な、もう一度、抱きしめ合つても……今度は佐藤さんの方から」

「……握手で」

私が言い終わると同時に、素早くよつしーが手を差し出した。普通、こんなシチューーション無いよね。まるで、その、何でもない。私も手を伸ばす。私が、よつしーの手を握る。

「僕は、あなたと違わない。傍に居て、触れる事の出来る人間です」

「……うん」  
「不思議ですよね。身体は本当は無いのに、僕には見えて、佐藤さんの体温を感じる」

「……うん」

「多分、佐藤さんの、身体じゃない部分、生命の能力なんですかね」  
「そういう難しい事は分からないうけど、とりあえず握手はもういいんじゃない？」

「身体が無いなら、遮る物はない。ぶつからないんだから」  
「そうだね。でも……」

「もう一度ドアを触れてみて下さー」

……ぺた。ドアだ。左手で押したり撫でたりしてみる。だつて右手、よつしーが握つてゐる。何だか、『離すつもりは毛頭なし!』な感じで。別にいいけど。

「どうなってるのかなあ」

よつしーは私の左手とドアのくついた辺りを覗き込む。私もちょっと顔を近付けてみると「わおー、近い！」

「佐藤さん、この手は佐藤さんの生命が生み出した、言わば擬似的な物です。佐藤さんが、必要だと思ったから、出来たんです。必要な時にいつでも用意出来る」

「なんだか滅茶苦茶な存在だね、私って」

「でもこの左手、今、要りますか？ ほら見て下さい」

よつしーは私の左手に息が掛かるくらい顔を近づけて観察してる。私も仕方なくまた、顔を近づける。

「ドアがこの手を押してる。ドアは邪魔だなあ。ドアの分際で生意気な」

よつしー、大丈夫？ 頭。

「今の佐藤さんの身体、佐藤さんの生命の前には物質なんて無いも同然。屁でもないですよ」

「……逆じゃない？ ドアの前には私は、居ないも同然……うわっ！」

びっくりした！ 左手、私の左手は？ あつた。私の左横に。手が、ストンと落ちた。

「はは、逆でしたね。ドアにとつては佐藤さんは居ないんだから、阻む必要なし！ な訳ですよ」

急によつしーが掴んだままだつた私の右手を離して肘の辺りを持ち上げる。今度は後ろに回つて私の左腕をも……。私は、あの前へ習え状態で、え？ 私の手、ドアに同化してる！？

「ほら、何でもない。佐藤さん、好きな様にし放題ですね」

よつしーが私の両腕で遊んでる。近いし、ていうか、いや、近いね。そんな事よりも、私の手はドアに埋まつてかき混ぜてるみたいに上下左右に動く。ドアは壊れない。

「凄い……これ、凄い！」

さすがに私は興奮してきた。何だか凄い超能力みたい！

「佐藤さん、これは当然なんですよ。健康に育つた人間が普通に歩いていて『今日も歩けるぞ!』って感激する様なもので、確かに感謝して良いんですが、毎日そんなに興奮してたらさすがに疲れますよ」

よつしー、笑つてゐる。

「だつてほら、見てよこれ、凄い！」

何だか嬉しい。楽しくなつてきた。んー、そう、まるで遊園地にテー  
トで行つて、ちょっとスリリングな乗り物で興奮気味の私を、彼  
が笑いながら眺めてる、そんな感じ。例えだから、例え。あくまで  
も。

でもよつしーは、ほんとそんな風に、笑つてた。

「じゃあ、行ってみましょ「うか」

「ん？」

「中」

あ、そうか、私、入れるんだね。おばあちゃんの「家の」。でも、勝手に入るのはやつぱり氣が引けるナビ……。

「誰も居ないなら、どうしてことありませんし、佐藤さんならひょつと意識するだけでほぼ完璧に氣配が消せますよ」

「やうなの？」

……人であるよつしーに聞くなんて、我ながら情けない。でもよつしーって何で「こままで色んな事、特に私の様な存在に関する事を知つてるんだらう~」……やはりオカルト研究会?

「じや、よろしく」

「う、うう」と

私は恐る恐る、ドアに身体を押し付けて　押すつて感覚は無いけど　埋まつていつた。

「う、うわあ……」

変な感じ。でも直ぐに視界が元に戻つて、玄関の中の様子が目に飛び込んできた。静かな廊下。綺麗に磨かれた床が、正面の奥に見える窓からの光を反射していた。

（お邪魔します……）

私は廊下に上がる。ん?　まてよ?　もしかして私は、あのドアみたいに床もすり抜けて落つこちるんじゃないでしょうか?　そつと足を床に下ろす。……落ちない。堅そうな床。でも?　すり抜ける事も出来る?　私は試しに、さつきのドアの時と同じ感覚をもつつる覚えだけど　思い出して、ほんの少しだけ体重を掛けてみる。

「あつー」

足が、ぐるぶしまで沈んでる。なんだか、笑えた。やつた。

さて、あんまり慣れて床の上を歩けなくなつても困るからこの辺にしといて、私は先に進む。どの部屋も入り口のドアやふすまは開け放たれていて、良く見える。そして人の気配は無い。外から見たとおり、広くて部屋がいっぱいあった。でも、割とすぐに分かる。誰も居ない。二階は？　このお家は二階建て。でも、おばあちゃん、一階に上がるかな？　ちょっと無理なんじや……？　でも一応見なこと。私はそつと二階へ上がる。

上がつてすぐの所にある部屋、ドアが閉まってる。……どうしよう？　開けてみる？　でももし中に誰か居たら、びっくりするよね。うーん。静かに近付いて、耳をドアに当てる。音は……無し。……そのまま、すり抜けてみよつか……でも、中からだとどう見える？　ドアからまず、私の鼻がじわじわと出でてきて、顔が……そして田があくびと中を見回して……。

（いやー……怖すぎる……）

自分の想像に身を震わせる私。絶対ヤダ。……じゃあどうしよう？　もしどこのかしておばあちゃんがここまで上がつて来てこの部屋で、倒れてたりしたり……。見なきや！

私は覚悟を決めて、ドアにまず手を触れさせて、通れる状態になる事を確認する。そして額から、徐々に前へと進んだ。ドアは薄かつた。すぐに中の状態が一目で確認出来た。誰も居ない。私はそのまま中に完全に入る。子供部屋？　学習机。戦隊ヒーローものつていうのかな？　あれの写真がパネルになつて学習机の本棚の下に貼り付けてある。おもちゃが片付けられた箱。おばあちゃんの……お孫さんの？

わつと、当時の、一年前のままなんだらうな。でもおばあちゃん、もしかしてもう上がつて来れなくて、この部屋も見ることが出来なくなつてたんじや……？

（おばあちゃん。おばあちゃんを探さなこと）

今度はドアを開けて廊下に出る。一階にはそんなに部屋は無い。

ちょっと行けば、すぐに誰も居ない事が分かった。階段を下りて、真つ直ぐ玄関に向かう。同じ様にして出ないと、鍵閉められないな。もう一度。外にはよつしーが居る筈。あのじわじわ出てくる顔だけは見せられない。私は勢い良く外へと飛び出した。

「ん？ よつしー？」

玄関の前には誰も居なかつた。

「おーい」

辺りを歩いてみる。ん、居た。家と垣根の間にあつた物置の陰に、ひつそりとよつしー。

「何してんの？」

「あ、いや、さつき前を人が通りかかったから。あそこだと待つてのも不自然だし。で、どうでした？」

「おばあちゃん、居なかつたよ……」

「そうですか。一人暮らしなら買い物とかも行かなきやならないし、そういうことでしょうね」

「でももう、暗くなるよ？」

「とにかく、戻りましょうか。道中会うかも知れないし」

私とよつしーは来た道を戻つていく。途中、スーパーがあつたから一人で入つてみる。おばあちゃん来てないかな？ 結構大勢な人。でもおばあちゃんの姿は見当たらない。今度はちょっと回り道をして商店街の方へ行つてみる。お年寄りは多かつたけど、あのおばあちゃんじやない。私が、『あつち』とか『こつち』とか色々言うのによつしーは付き合つてくれて、かなり歩き回つた。初めてだな。あの場所を離れてこんなにうろうろするなんて。私は全然平氣だつたけど、さすがによつしーは疲れたかも。

「佐藤さん、また明日、お婆さんの家行つてみましょう」

「……うん」

二人がコンビニの前まで戻つてきた時には、殆ど陽は沈んで、もう夜になるところだつた。

「もしかしたら、いつかの夜みたいにおばあちゃん来てくれるかも

しれないな……」

私はそんな願望を込めた独り言を口にして、慌てた。

「あ、今日は、ありがとう。その。もう疲れたでしょ？『ごめんね』よつしーも一緒に待つて欲しいとか、そういう意味じゃないから、帰つて休んで。

「……いや。じゃあまた明日。あ、それから、あのドアのすり抜けやつ、ちょっと練習して慣れればもう自在に出来るようになるんじゃないかな？」

「そうだね。はは、あれ、便利だね」

「悪用はしないように」

「あはは、何に使うのよ

「それじゃ

よつしはいつもの『ごく、手をひらひらさせ徒步き出す。おつと、私ももう戻らないと。こんな所で姿を現したらみんなびっくりするな。ん？でも、私を知らない人なら、居ても何とも思わないんじゃないの？……あそこにずっと立つてると怖いんであって。……でも、まあ今は、戻ろう。

私は、いつもの定位置目指して歩き出す。歩くのって、楽しいな。今は疲れないから楽しいのかな？ 多分、そうね  
足が軽い。軽快に足を繰り出して進む。通りから離れれば離れる程暗くなつていく道。そんな中

（ん？）

前に、……誰か居る？ 動いてる人影。歩いてる？ 私と同じ方向に歩く人。ちょっとゆっくりで……。もうこれだけ暗くなつたら来る人なんて居ない筈。もし今日わたしがよつしーと出歩かなかつたら、あそこで私を見た筈。の人、ラッキーだね。怖い思いしなくて済むもん。私は早く行つて追いついたりしてしまわないように間隔を確保して。

そのまま暫く行くと、その人は道を左に曲がつて行こうとする。

（あれ？ あそこ、左に行く道なんてあつたっけ？）

この道はこのまま真っ直ぐと、右に折れる道で丁字路になつていて。角に公園があつて。あそこ……あそこって！ 線路！ 間違いない！ あの人のかずかれたのつて、踏み切り！ あの人、線路に入つて行つちやつた！

私は早足でその人の後を追う。まさか線路の整備する係の人とかじやないよね。明かりも持つてないみたいだつたし。踏み切りの所にひとつ照明があるだけで、あの人、人が入つていつた方にはしばらく行かないと次の明かりは、無い。……もしかして、もしかして！

私と同じ様に？

走る。私は走り出す。あの人、人がどういうつもりなのか分からぬ。それでもとにかく！ 急がなきや！ 踏切まで数十メートル、百はない。とにかく走つた。まるで踏み切りにゴールのテープが張つてあるかの様に。そして、踏み切りまで到達しようとしたその時、

『 カンカンカンカン

まるでゴールを祝う鐘の様な音が響き始めた。

（うそ！？）

あの人、あの人、あの人、どこまで！

明かりが何も無い暗がり。居る！ ゆっくり線路の中央を歩いてる！

「待つて！」

私は叫ぶ。でも、その人は全く反応せずに進む。私は再び駆け出す。

「電車が、電車がもうすぐ来るのよ！」

叫び続けながらその人に近付いた。ゆっくり進む人。一定のリズムで出される、杖？ 少し丸まつた背中。

「お、おばあちゃんあん！」

何で？ 何でこんな所にいるの！ ビコヘ行くの！ ダメよ！ ダメなのよ！

私はすぐに追いついた。おばあちゃんに。でも、おばあちゃんは全く私のほうを見なくて、ただ、前を。

「おばあちゃん！ 私よ！ 危ないから戻つて！ おばあちゃん！」

私はおばあちゃんの肩を掴もうと両腕を出す。

「えつ？ 何で？ 何で！？」

私の手がおばあちゃんの肩に留まらない！ 掴めない！ 何でよ！

私はおばあちゃんの前に立ちふさがる。

「おばあちゃん！ 私！ 見えるよね？ おばあちゃん！ いつち  
を、私見て！」

その瞬間、おばあちゃんの田じやなくて、光、強い光が遠くから私  
に向けられた。田がくらむ程の、電車のライト。一瞬息をのむ。

「おばあちゃん！ 返事をして！、私に気付いてよ！」

「佐藤さん！？」

不意に私じゃない声。

「佐藤さん！ どうしたんですか！？」

「よつしー！

「おばあちゃんが！ おばあちゃんが！」と叫ぶの！ 私が、見え  
ないのよ！」

踏み切りからよつしーが飛び出してくる。長い直線の線路だから電  
車のライトは遮られる事はない。よつしーの顔は全く見えない。強  
い逆光で。いつちに走つてくる。でも……電車が……。

「おばあちゃんが！ おばあちゃんが私には触れないの！ 触れな  
いのよ！」

「佐藤さん落ち着いて！」

「プアアアアアアアアーン」

警笛が響く。思わずよつしーが電車を振り返る。もうどれくらい  
だろう？ 電車つて結構なスピードで走つてゐよね。特に直線。

「もうダメよ！ 逃げて！」

よつしーがここに来るのが早いか、電車が先か、もつ分からない。

「おばあちゃん！ いつち！ いつちよ！」「

私はおばあちゃんの前で横の草むらへ行つて止む。よつと避け

るだけで助かる。

「おばあちゃん！ 何で！ 何で聞こえないの！？ 話したじやない！ なのに！」

「佐藤さん！ 気持ちを落ち着けて！ あなたは、おばあちゃんと話せるし、触れられる。信じて！」

よつしーも叫び声で。

「おばあちゃん！ 死んじやだめだよー！」

もう、すぐ。

「おばあちゃん！」

私は、身体をおばあちゃんに思いつきつづけた。おばあちゃんを助ける。助ける為に必要な物は。

そして確かに私はぶつかった。おばあちゃんに。とにかく夢中で。足元がどんなふうになっていたのか分からぬけど、私は線路脇の草むらに飛び込むようにして突っ込んで、転がった。胸に重い感覚。必死になつて力んでいる私の腕の中に、おばあちゃんが居た。

（助かった……）

ぼんやりと見上げる眩い線路。電車が……通過する……。

「え？」

私の視界にあつたのは、……よつしー？ よつしーが飛び出している！？ 私を見て、おばあちゃんを見て、安堵の表情で……そして、その姿を一気にペンキで塗りつぶすように、電車の薄い水色が覆つた。

「よつしー……！」

見間違いじゃない。よつしーは確かに線路の上に居た。向こう側じゃない。私は田を思いつきり見開いたまま呆然としていた。そして電車の最後の車両が、通り過ぎた。

「……はは、助けられましたね、お婆さん」

私の目はまっつとそのまま。口も開きつ放し。でも、更なる衝撃映像に頭がどうにかなりそうなどこれまでショックを受けて……。

電車が通過する前と同じポーズの、よつしーが、そこに座る。… どういう事?…

「佐藤さん、電車が止まりますよー。急ぎましょー。今ならまだ間に合ひー!」

え? 急ぐつて……何を?

「佐藤さんー、ほら、早く。杖、持つてください。僕がおばあさんを……」

よつしーがおばあちゃんを抱きかかる。

「これは……結構きつい……」

よつしーは細腕を震わせながら線路に上がって踏み切りの方へ向かう。

「佐藤さんー、何してるんですか。電車の人、運転手か誰かが降りて来ますよー。かなり煩わしいことになります! 早く

「う、うん」

私もようやく事態が飲み込めて、慌ててよつしーを追いかける。私は派手に草むらにダイブしたけど、怪我は無い。怪我をする性能を持つ程の身体を再現する能力は無いから。おばあちゃんは、大丈夫だつたろうか?

「よつしー、おばあちゃんは? 大丈夫かな?」

私はよつしーの傍でおばあちゃんの顔を覗き込む。微かにうめく様な声がおばあちゃんの口から漏れている。

「急いで病院に行つた方がいいですね。素人が見た目で判断なんて出来ませんから。道にうずくまつっていたのを見つけたって事にしましょう。場所は……あの踏み切りじゃなくて、コンビニの横の角で

「うん」

「それから、」

よつしーの息が切れる。小柄なおばあちゃんだけど、赤ん坊を抱くのとは訳が違う。かなり重労働。

「初めてですね。佐藤さん、『よつしー』って呼んでくれたの

「え、あーいや、そうだけ?」

「何ていうか、佐藤さんがぐつと近くなった感じですよ。もうそろそろ僕も、明子さんくらい呼んでもまだ早いわっ！小僧！」

「馬鹿な事言つてないで急いで！」

「い、急いでますよ。電車のほう、どうですか？」

私は電車が停止している場所に目をやる。もう結構離れたから人影とかは見えない。

「人は見えないなあ」

「ま、あの辺をしばらく搜索するでしょうけど、大丈夫ですよ。何も無いんだから」

なんとかコンビニの所までたどり着いて、コンビニで救急車を呼んでもらう事にした。念のために私は表で待つて、よつしーがおばあちゃんを抱きかかえたまま中に入った。待つこと数分。救急車つて意外に早いんだね。どこから来たのか知らないけど。すぐにおばあちゃんは救急車に乗せられて、よつしーは救急隊の人に乗るよう言われてたけど、何か言つて断つてた。

「明日、病院行きましょう。市立総合に向かうそうです。一人暮らしだし、まあしばらく入院になるのかな？」

「……そうだね」

救急車が走り去つて、しばらくそつちの方向を一人して眺めてた。よつしーももう帰るよね……。私、もうあそこに居るの、ヤだな……。もうちょっと……。もうちょっとだけ……あっ！ そうだ！ よつしー、怪我は？ つていうか、アレ、何だつたの？ 聞かなきや。

「ねえ」

「佐藤さん」

「え？」

「ん？」

ああっ！ もうじつじつと凄く煩わしい！ だから私は即座に口を

閉ざす。

「なんですか？」

「よつしー、——口——口してゐる。OK。私が先ね。

「あのおれ、あの線路の上で……まともに電車にぶつかった様に見えたんだけど……。よつしーが」

「……え？ そりですか？」

「……見間違いだったのかなあ？」

「まともにぶつかったのなら、無事では歸られませんね」

「……そりだよねえ」

私は簡単に話を切り上げるつもりは無かつた。私はじつと、よつしーの顔を、田を見つめてる。よつしーも気付いて見つめ合つりやつてるんだけど、私はそんな事より、あの時のよつしーの状態の方がとても重要で、知りたかったから。

「あのや」

「佐藤さん」

……。

「なんですか？」

「今度は、よつしーからでいいよ

「じゃあ、お言葉に甘えて。佐藤さんどこか遊びに行きましょう。

今から

「え、今から？」

「だつて、明日病院に行くまで、暇ですか？」

「私は、さうだけど……よつしーは？ 暇なの？」

「あなたも……『私と同じ様に』、暇だつたりする訳？ 他にしなきやいけないことは、何も無いの？」

「暇ですね。僕、かなり自由ですから

「何それ

「そうだ、ちよつと足を伸ばして朝までやつてゐるパーヒーショップにでも行きますか？ かなり粘れますよ。よく行く所があつてね」

「……朝まで居るの？ 私と？」

「あー、佐藤さんがよければ、ですけど……」

そういう事じゃないで。朝まで一緒に、なんて別に構わない。そういうなくて、よっしー、あなたは家に帰らないし、寝ないつて？ で、今日は昼間、私と一緒に、明日は昼間から病院行つて？

「佐藤さん？」あの、何か……怒つてます？」

「え？ あてもねえよ。」

「その…………あなたって

「佐藤さんの言いたい事は、察しが付いてるんですけど……」  
「何て言おう？ 今、すぐ、よつしーの事が知りたい。素性が知りたいって意味よ。で、もう、予想は……。普通なら馬鹿馬鹿しいと考え直すんだろうけど、じゃあ、私は？ って思つて……。」

うわっ！ 今度は、何だか恥ずかしいぞっ！ こんな所で、見つめ合ひちゃって！ われじやあまるで……。

「行きましょう。朝まで時間はたっぷりありますから、話しますよ。佐藤さんが聞きたい事を。一緒に行つてくれたら」  
「……喫茶店くらいならね」

「決まり。じゃあ行きましょうか。」  
案内します

よつしー、左手をすつと差し出して。……どこ行くのか知らないけど、手をつないで行く訳？ 人が見たら……あ。今、見えるよね、私。私を知ってる人が見たらびっくりするよね。でも。知らない男の子と手を繋いでる光景つて、どうなのかな？ びっくりするけど……あそこでぼうつと立つてるよりは、全然いいよね？

しうがない。お姉さんが、手、繋いであげるよ。

## 広大無辺の、自由なカゴ

私は眠くならない。いつもながらまだ一ヶ月程だけど、眠くならないと、寝ないと、一日がものすごく長い。正直言つて、時間を持て余す。もし普通に身体があつて、ただ睡眠だけは必要ないつて状態に突然なつたら、きっと、人は疲れ果てる。恐らく深く考えないまま今までの倍の量、時間、動こうとするから。今までやつていた仕事なり何なりを、速度を半分に落としてのんびりやればつまり仕事の量は同じで、きっと問題ない。でも、我慢出来るかな？許せるかな？あまりにも怠惰な自分が。ほんとは怠惰でも何でも無いんだろうけど。

私は眠くならない。しかも疲れもしない。じゃあ、今までの倍、動くのが当然で、同じだつたら怠けてる事にならないだろうか？でもそんな事言つたつて、私は会社に勤めてる訳でも無いし、学生でもない。今は。何をすればいい？

自分で見つけろつて？ねえ、私さ、生きるの、辞めたんだよね？ちゃんと、辞められたんだよね？

よつしーは、全くと言つていいく程、勿体ぶらなかつた。本当に私の聞きたい事、聞きたい言葉を、私に、告白した。でも、初めて聞く言葉じやなかつた。おばあちゃんの家に行つた時、よつしー、言つたもん。

『僕は、あなたと違わない』

既に聞いてた言葉なんだけど、でもね、凄く、ドキドキしたんだ。

普通の、生きている人には、『それが何？』なのかなあ？反発してしまうかも。『同じつて何よ！私はあなたとは違うのよ！私の事何にも知らないくせに！』とか。でもね、私には違つた。それは、凄く聞きたい言葉だつた。言つてくれたなら、私、その、何ていうか……。まるでよつしーが、私の事を『好きだ』つて言つたつ

てくらい、嬉しかったんだ。

「……ん？ あ、違う！ そりじゃないって！ よつしーは好きだ  
なんて言つてないしだから私も嬉しくなんか、つてまた間違ってる  
し！ 『好き』と『嬉しい』は忘れて！ あーもうこの話はおしま  
いっ！」

「佐藤さん」

「ん？」

「佐藤さんも慣れたら、昼間だっここに来れますよ。ここはちよ  
つと離れてるし、知つてる人に会う事はそりゃないんじゃなか  
なあ？」

「昼でも人に、見えるよつになるつて事？」

「ええ」

結構広い綺麗な喫茶店。よつしーと一人で、本当に朝を迎えた。  
「コーヒーだけでほんとに大丈夫か？」と思つたけど、さすがに深夜  
から明け方にかけては店員さんも氣力が落ちるようで、ほとんど私  
たちは捨て置かれていた、つて感じ。

「コーヒーをどうするのか？ 私も真つ先に思つた。『コーヒーは私  
の身体とは別な物。飲んだら、やつぱり、おトイレ？  
「まあとにかく、普通に飲めば良いんですよ。心配いりません」  
そう、何度もよつしーが言うから、まあ、飲んでみた。  
「飲みましたね？ 今、飲みましたね？」

「なつ、何！？」

「佐藤さん……。この一ヶ月の間、トイレに行つた事は？」

「無い……けど」

「何も食べたり飲んだりしてませんよねえ？」

「うん……何よ？ どうなるのよ？」

「……トイレに行きたくなります」

「……まあ、いいわ」

「佐藤さん」

「ん？ トイレくらい別に」 「

「コーヒーが出ます」

「ぶつ！ つて、何とか盛大に吹き出すのは堪えただけ、ちょっと、こぼれた。

「「コーヒー？」 まさかそのまま？」

「はい。淹れたてなら、淹れたてが」

「ヤダ。コーヒーは汚いイメージ無いけど、でもそれはイヤだ。だから、飲み物はまだいいですが、固体物を飲み込むのは止めた方が良いでしょう」

「うだよね、ヤバイよ。……こんな話はもう止めよ。」

「ねえ、お金、持つてゐるの？」

「よつしーの事だから『心配ない』って言つんだね」

「あー、今は持つてませんけど、心配要ります」

「無いの？ どうするのよこのコーヒー？」

「まあまあ、大丈夫ですか。僕に任せて下さー」

「……私、逃げるからね。もし躊躇になつたら。壁のすり抜けしてでも。まさか！ 一人して逃げるつもりじゃないでしょ？ うねー？ よつしーも、私と……。

「夜が明けましたね」

「えつ？ ああ」

「たまには布団が恋しくなる事もあるんですけどね」

「よつしーは射し込む朝の光に目を細めている。……十五歳……おかしい。」

「じゃあ、そろそろ出ましょ？ ちょっと待つててください」  
「よつしーはそつまつて立ち上がり、レジのある方へ向かっていく。  
私は首を伸ばして、一体どうやるのかを監視。だけど、普通に店員  
がレジに入つて、何か受け渡しして、レシートも？ ほんとはお金  
持つてたんでしょう？ よつしー。

「じゃ、行きましょ」

すぐによつしーは戻つてきて私に言つ。レシートをひらひらさせた。

「差し上げましょ」

私はすぐにそれを握んで、まじまじと見つめた。私達何杯コーヒー頼んだつけ？ げ、四千一百円。お預かり……五千円でお釣り八百円。

「お金持ちは」

「はは。おこづかいが結構……って言つても、もう通用しませんよね」

「そうね。またあらためて説明してもらつわ」

外に出て朝日でキラキラしてゐる街を眺めた。

「まだ病院行くには早いんですけど、歩きだし、いろいろ散歩しながら行きましょ」

「うん」

「佐藤さん、また手を繋いで行きますか？」

「……繋ぎたいんでしょ？」

「そうですね……。僕が十五になる前だつたら、とても恥ずかしくて出来なかつたでしきうけど、今は、違います。佐藤さんと、手を繋いで歩きたい。人に見せたい位ですよ」

「……見せてまわるのは勘弁して欲しいけど、そうだね。何だか、堂々と手を繋いだり、楽しいよね」

「そうよ。私は自由になつたんだから。したいと想つ事をしよう。だから、また、よつしーと手を繋ぐ。だから、また、よつしーと手を繋ぐ。」

病院までの道のり、どこも見知つた風景だつたけど、やつぱり印象がちよつと違う。昔の私と違つからなのか、よつしーと手まで繋いで歩いたからなのか、どつちかな？ んー、どつちもかな。今日が良い天氣で良かつた。

市立の、この辺りでは一番大きい総合病院。風邪で何度も来た事のある所。風邪ごときでこんな大きい所、来ない方がいいんじやな

いかと健康な時には思つてしまつ。だつて外来の患者さんこつも一杯で、ちょっと受付遅れたらもう診察終るのが午後の二時とか三時とか。でも、自分が風邪で辛いどどつしても来てしまつ。何となくだけど、安心感。ここに、おばあちゃんが居る。

まだ早い時間だつたけど、おばあちゃんは近くに身寄りが無いし、よつしーが第一発見者だつたのど、おばあちゃん、どじも悪くなかつたらしくて、すぐに会わせて貰う事が出来た。向かつたのは三階の相部屋。六つのベッドはみんな埋まつてて、全員、お年寄り。寝てる人も居たから、私とよつしーは黙つたままよつしーと会話をしてカーテンで囲まれたおばあちゃんのベッドに向かつ。

おばあちゃんは横になつてたけど、すぐに私達に気付いた。

「おばあちゃん……」

「お加減はどうですか？」

おばあちゃんは私達を見て、ちょっと頷いた。  
「体には異常無いそうですね。安心しました」

よつしーが優しく声を掛けた。おばあちゃんがゆつくつと上体を起こそうとしたから私がその背中を支える。あ……、出来る。出来た。私はちよつとびっくりして、よつしーを見てしまつ。よつしーは、ただ笑うだけだつた。

「おばあちゃん。私、分かる？」

「……ごめんなさい。ごめんなさいね」

おばあちゃん、涙、流してた。私が見えないからじゃない。おばあちゃん、私に向かつて言つてるから。

「あの時、私ね。聞こえたのよ、見えたのよ。佐藤さん、あなたが」

「え？ でも……」

「あなたが、必死で言つてくれてるの……でも、でもね。ケンジが……ケンジもあの時……」

「ケンジ？」

「それは……もしかしてあなたの孫さんですか？」

よつしーが訊ねる。冷静に、静かに。おばあちゃんは頷いた。

「ケンジは、……寂しいの。小学校に上がつたばかりで、まだ小さな子供よ。寂しい、怖いって、泣くの。私が、行つてあげないと……」

「おばあちゃん、そのケンジ君が、あの時あそこに居たの？」

私は感じなかつた。見えなかつた。あの踏み切りからおばあちゃんを見た時、もう私は興奮状態で、周りの事なんて、おばあちゃんがどこを見るかなんて考えてなかつたからかもしれない。

「ケンジが、私に早く来て欲しいって、泣くの」

それは……そんなのダメよ……。確かに寂しいかも知れないけど、そんなの……。

「お孫さんが亡くなつたのは、一年前ですよね？」

よつしー、ちょっと声が大きくなる。ほんのちょっとだけど。

「お孫さんは今まであなたにそつと見つてましたか？ あなたに……姿を見せていた？」

「いいえ、一度も……。もう、ケンジはあそこには居ないんだと思つてたわ。きっと成仏して、幸せになつてるんだと」

……私は、なつてない。ずっとあそこに居続けた。ケンジ君は、成仏したの？ だから居なくなつたの？ 私は出来なくて……。

「お孫さんの姿は、はつきりと見えていましたか？ ……そう、はつきりと？」

おばあちゃんは力なく首を振つた。

「ただ、何か光りが見えて、でも、声は聞こえてたの。佐藤さんが私の前に立ちはだかつたけれど、私は、ケンジが居ると思つて夢中になつて……」

何て言つていいか分からない。あそこに居たというケンジ君が本物なのかどうかも私には分からないし、それ以前におばあちゃんが本当に見てたのか、それとも、そう思い込んでしまつただけなのか……。このままではまた、おばあちゃんは……？

「あなたの、お孫さんへの想いがとても強くて、幻を見てしまった

んですね

……よつしー、そんななまつさつとまつていいの？ 本当に幻なの？

「他人人が言えれば信じられないかも知れない。でも僕等はちょっと違つから、信じて下せー。お孫さんが一年もの間、一度も姿を現さなかつたのに、昨日いきなりお婆さんを呼ぶなんてありえないんです。お孫さんは、あなたと一緒に暮らしてきて、きっと、大好きだつたでしょう。だけど、突然、引き裂かれて……。でもお孫さんは、さつき言われた通り、成仏して、幸せになつてゐると思います。もしそうでないのなら、きっとお孫さんが亡くなつたその日、あなたの所に、泣きながらでも、姿を現したに違ひないんです。あなたには今、佐藤さんが見えるでしょ？ 同じ様に、お孫さんを見た筈です！ 抱きしめた筈です！」

おばあちゃん、泣かないで。おばあちゃんは何も悪くないんだからね？ 一年も、辛かつたね……。

「佐藤さんに会つたから、お孫さんも居ると想つやつたのかも知れませんね」

私に……会つたから……。

「でもほり、成仏せずに居るのなら、やつぱりいじつて佐藤さんと同じ様に、会いに来た筈なんですよ。来ないのは、お孫さんが、空の上からお婆ちゃんを見守り、そういう事に決めたからじゃないんですか？」

「ケンジィイー！」

おばあちゃんは、ケンジィーの前方を握り出すよつて、泣きながら、呼んだ。

私はそつと、おばあちゃんの細い肩を抱いて、背中を撫でて、おばあちゃんの頭に頬を寄せて。

「ちよつとどうしたの？ お婆ちゃん大丈夫？ あなた達、一体何を？」

看護士さんがやってきて私達を睨みつける。

「どうしたの？ どこか痛い？ あなた達はちょっとまってー。」

「説明は難しいよね。この状況では。

「やめてー。その子達は来てくれたのよー。あなたが出て行つてー。おばあちゃん……。潤んだ瞳で、看護士さんを睨みつけてる。よつ

しーが看護士さんに、

「もう少ししたら帰りますので。すいません」

「やつ……ですか」

本当にすいません。看護士さんとしては当然の事よね。患者さんが泣かされてるんだもん。

「おばあちゃん……」

「私がどうかしてたのね。『めんなさい。許して……』

「おばあちゃん、大丈夫だよ。私達、全然平気だから」

「佐藤さん」

おばあちゃんが私の腕を掴まる。

「あなたは、急に居なくなつたりしないで欲しいの。ケンジとは、もう一年も経つたんだし、頑張つて、理解するように頑張るから。でもあなたは、まだ居るんでしょう？ いつかあなたも、ケンジの様に幸せになる時が来る。でも、その時は急に消えたりしないで欲しい。あなたを、祝福して……それで……」

「おばあちゃん……ありがとうございます」

しばらく、おばあちゃんと抱き合つたまま。……絶対、急に消えたりしない。勝手に居なくなつたりしないよ。

「入院は長くならなにようですけど、聞いておられますか？」

「ええ、先生が今朝、今日は休んで明日退院でいいでしょ」と仰つたから、明日には

「そうですか。じゃあ、明日迎えに来ますよ。時間は看護士さんで聞いて早めに来ておきますから」

「でもよつしー、車とか無いと……」

「タクシーがいつぱいあるじゃ ないですか」

「あ、そうか」

もつ、タクシー使うとかそういう感覚がここ一ヶ月無かつた。『人』の様に生活するという事が。

「じゃ、ゆつくり休んでください」

「おばあちゃん、また明日ね」

「ありがとう。ありがとうね」

随分、久しぶりのおばあちゃんの笑顔。良かつた。ほんと、良かつたよ。

「ちょっと座りませんか」

病院の建物を出てすぐのところにベンチがあつて、周りは緑が一杯で、ちょっとした公園みたいになつてゐる。私とよつしーはベンチが汚れてないか確かめて、腰を下ろす。

「さて、あのお婆さんのお孫さん、ビニに面るんでしょう？」

「……何それ？」

「お孫さん。ビニに行つたのか、気になります」

「よつしーちつとも自分で、ケンジ君が成仏した筈だつて……」

「ええ。そう考える方が良いし、それと同様であると考えるのが妥当な段階に至つてゐる、という可能性が高いから」

何言つてるの？ 意味が分からない。

「……ちょっとまだ佐藤さんには難しいかと」

「何よそれ！ 私には分からぬ？ あなたには分かつて私は理解出来ないって言うの！？」

私は思わず立ち上がつて、よつしーに怒鳴つた。まだ難しいって、馬鹿にして！ そりや色々私の知らない事をあなたは知つてゐたいだけど、私だつて、理解出来るわよー。三つも年下の癖にー。説明したらいいでしょ！ 早く言いなさいよ！

「佐藤さん、僕も……どう、あなたに言えばいいか、迷つてゐるんです。いや、言わなくてもいいんじゃないか、とも考えたり。でも……

…

よつしーはそう言つて、頭を抱える。な、何よ。余計に不安になるじゃない。

「あの、佐藤さん、座つてもらえませんか？ 失礼な事言つて、ごめんなさい」

「う、……うん」

何だろ？ ほんとに頭抱えちゃう様な事つて、何なんだろ？

「あの、人つて、死んだらどうなると思ひます？」

「え？ それは、あれでしょ？ 死んだら」

「あー！ いや、今の無しで。言ひます。おかしかつたら笑つて結構。大いに笑つてください。でも、怒るのは、……無しで」

。

「人は、死んだら、体が無くなります。物質的な体が

……それで？

「それだけ」

。

「あ、それから、また体を持ちます」

「え？」

「それだけ。以後繰り返し」

「はあつ？」

「あ、最初の体が無くなるつてのは、今の佐藤さんの状態です」

「……よつしーも、でしょ……？」

「ええ……まあ」

「分かつたわ」

「え？ それは……良かつた」

「私の今の段階が、よ。で？ 次は体を持つと。その間、どこに行くの？」

「いや、だから、次は体を再び持つ段階で……」

「それまでよ！ どこに居るのよ！」

「どこつて……、佐藤さん、今ここに居るじゃないですか」

「天国とか！ 行きたくは無いけど地獄とかよ！ そこはいつ行くのよー？」

「それが……ありません」

「無い？ そんな訳ないでしょ？」

「佐藤さんは、いや、僕達はこうして現実の社会に体だけが無い状態で、生きます。どこにも行かない。行く所も無い。この世界の中だけで、体を持ったり、無くしたり、それを繰り返すんですよ。そして、ずーっと、生きている」

「神様とか……居ないわけ？『成仏』っていうのがダメならキリスト教とかはダメ？ 神様の所に行くとか……」

「神が居るかどうかは、分かりません。いや、絵的には居る方が分かりやすいかな？」

「んん？」

「神が居て、自分の部屋だかどこかに、鳥カゴをぶら下げるて、その中にこの世界がある。というか、その鳥カゴが、この世界。でも、ものすゞく広いんです。何でも出来るし。でも、鳥カゴ。檻、ですかね」

「でも、でもさ、この世の中の人、みんな天国とか成仏とか信じてるんだよ？ 私も信じてるけど、これって大昔から言われてる事じゃない。色んな国でも。それが無いなんて……」

「言つてるだけですよ。願望です。体があると苦しんだり痛い思いもするから、死んだら軽くなつて神様の所に行つて、遊んで暮らしたい。そう思えば、まあ苦しいのにも少しは耐えようかなつて」

「何で！ 何でよつしーにはそれが分かるのよ！ それが間違いかも知れないじやない！」

「間違いだつたらどれだけいいか……」

「私、信じられない。信じないからねー！」

「ええ、まあこれは信じても信じなくても、同じ様なものですから。それにもか、お孫さん、もう次の体を持って、どこかに居るというのが僕の予想ですが……」

「え？」

「僕の説では、天国で遊ぶという部分が無い。なので、今も僕達と同じ様にしているのか、もしくは次の段階である再び体を持つて生活を始めたか どんなに早くその段階に移行してもまだ一歳ですけどね。で、僕達と同じ段階には無いと考える根拠は、彼はまだ幼かった。家の近くで体を失う事になつて、どこに行くでしょう？このあたりで迷子にならないんじゃないですか？ お婆さんは近くに居る。何故か遠くに行つてしまふなんて考えにくいんです。えーっとこれはですね、佐藤さんや僕がどこかに行くには、自分で行かないといけない。光が降つて来て連れて行かれる事も無い。彼も同じです。僕は体を失つた段階の人がすぐ分かります。かなりの範囲で。でも彼は居ません。じゃあやつぱり、僕達とは違う段階に居るという事になる訳です。そしてそれが僕の考える、いわゆる『成仏』と同等と判断してもいいだろうと思う状態です。ただしそれは僕達の段階から次へ移行したから『僕達はそう捉えよう』という考え方であつて、実際は『成仏』よりも『誕生』でしょうか。いや、『回帰』かな？ そして、それは、『出来た！ 良かった！』という類の物ではなくて、そうならなくてはならないんです。義務、みたいな

「あ、あのぞ、今度、紙に書いて説明してもらつてもいい？」

「あー、はい」

よつしー、今ちょっとがっかりしたみたいね。……『ごめん。

「あ、檻のイメージは分かつたよ？ 鳥カゴか。でももしそうだったら、何だか悲しいよね」

「んー、でも無限に広いんですよ？ 端を見る事なんて一生、いや、どれだけ時間があつても無理です。だから、そのカゴの格子を目の当たりにしてストレスを感じる事は、あり得ないと黙つて良い程ですよ。それよりも大変なのは

「何があるの？」

「僕達が体を失う直前に持つていた期待。あれが、全く見当違いだ

つたという事です」

期待。苦しい想いから逃れて、全て消し去つて、柔らかい光に包まれて、幸せを感じる私。何度も想像したんだ。そして私を苦しめた人達を高みから眺めて、鼻で笑つてやるの。せいぜい傷付け合つてなさいつて。私は嫌な毎日を、人間の生活を捨ててやる。そう思つた。

でも、それは出来ない？ よつしーの話はまだよく分からなければ、確かに私はあの日から一ヶ月経つた今も、期待した状態になつてない。ただ体を失つただけで、まだ生きている。この世界に。このまま続く可能性は十分にある。

よつしーは体を失つてどれくらいになるんだろう？ まだ、自分からは聞けない。だつてそれは、彼の、苦しみや悲しみのピークの時の事を聞く事だから。

「」のまま、どういう風に生きていけばいいんだろう？ だんだん知り合いも増えて、体があつた時と同じ様に、私の人生の第二幕が作られていく。次は、失敗出来ない。だつて、もう逃げ道が無いから。私が鳥力ゴに居るのなら、次の段階は、あの死にたくなつたあの生活。信じないつて言つたけど、不安になる。

「佐藤さん？」

「えつ？ あ、何？」

「今からそんなに考え込まなくても時間はたつぱりありますよ」

「いやー、別に考へてる訳じゃないけど……」

「とにかく、僕達は、生き続けなきゃいけないんですよ。僕達は今、自由になつたようにも思える。だけど、これはちょっと問題のある自由なんです。……えー、ここはまた追々話していくましょ。いずれお互に、真剣に考えなければいけない部分で……つて、まあ、今の所は、腹が減らないのと病気にならないのが『救い』

だつたなー、くらこにしどきまして

「はは、もうちょっと豪華なのが良かつたんだけど」

「今の間に、この世界の事をもつともつと知つておくべきだと思ひます。お互に。僕達はまた、この世界で生まれるんだから。……今の状態になつて思つたんです。僅か十五歳で自分が認識してた世界がなんて狭かつたのか、を。何度も何度も苦しみにぶつかつて、それでもそれを破ろうとこだわつて。世界は一直線の棒なんかじやない。丸いんです。前に進まなきやつて言つたど、じゃあお前は後ろの一一番端つこから走つてきたのかと。どうせ途中からだろ？ 端を見たことある奴なんていないので。広大な鳥力ゴに止まり木が横たわつてて、その上をみんな進みたがつて。壁があつたらもうお手上げで、あきらめてしまつ。でも鳥力ゴですよ？ おまえは鳥じやないのか？ 飛べよ。回り込めよ。いや、止まり木の端つこ田指してどうするんだ？ 世界は無限に広いのに。好きな方に飛べ。どこもかしこも『前』なんだよ。体を捨てて終わろうなんて思つような苦しみは足で泥でもひつかけて放つといたら良かつたんだ。別な方へ飛んでいつたらい。この世に『逃げる』なんて無い。この鳥力ゴに逃げる場所は無いから。『諦めずに突つ込め、逃げるな』としつこく言つてくる奴は、ただそこに僕を留まらせたいだけの連中だつた！」

「よつしー、……熱いね」

「……少しすつきりしましたよ。たまにはこいつの面も見せて、佐藤さんの乙女心をくすぐらないとね」

「……それ、言わなけりや、かなりいいトコまで行つたのに」

「うん。ほんと、いいトコまでいつてるよ。よつしー。もう一息かもね。

「では行きましょうか。世界を知る旅へ」

「は？ どこに？ どこで分かるのそんなの。歩いて行く気？」

「とりあえず、今日は佐藤さんにサービスしましょう。遊園地でも

行きますか。まだ時間もたっぷりあるし

「……そこでどんな世界の謎が分かるのかな？」

「その前にまず『己』を知らないといけません。しかし、自分で自分で自分がよく見えないもんですよ。ですから、お互いを観察する事にしましょ」

「……何だか、ヤだ。

「コーヒーをカップつてあるでしょ？ あれにカップルで乗つて、『アハハハハ』としつかり発音しながら廻つてると、その世界の神が憑依して、本気でそう笑えるようになつて幸せになれるそうですよ」

「イヤ！ 絶対やらない！ その世界つてビリの世界よ。そんな神、絶対居ない！」

それに、お互いを知る事と関係ないじゃない。

「んー、勿論、信仰に関する自由は僕達にも許されるべきですから、尊重します」

よつやく僕達は病院のベンチから立ち上がり、歩き出した。本当によつしーは遊園地に行くつもりらしい。電車に乗るつて言つ。ほんと、変わらない。何も変わつてない。こつやつて今、ここに居るよつしーは、『生きるのか。生きなきやならないのか』って、思つ。また辛い事が起きたんだろうか？ でも、出だしあはあちゃんはいい人だし、よつしーも居るしね。あの難しい話は、まあほりほち考え方よ。その内、よつしーがまた解説しだすわ。

僕達は電車に乗る。人の波に乗つて。切符をよつしーが買つて、並んで地下のホームへの階段を下りていぐ。よつしーの、ちょっと熱くなつた左手を握つて。

下から吹き上る風に、僕達は少し押された。

ある日、よつしーが会わせたい子が居るって突然言つた。近くに居るからつて。その子も、私達と同じらしい。前に行つた喫茶店。あそこに居るからつて、私は連れて行かれた。一人で喫茶店に入れりつて事は、どうやら私よりも経験豊からしい。変な表現だけど。

「よう

よつしーが声を掛けたその子は、……女の子。よつしーと同じくひいの。ふーん。そう、女の子。私、邪魔じやないかしら?

「ねえよつすいー、凄く暇なんだけど

ん? 今なんて言つた? よつすいー? それがネイティブの発音でわけ?

「じゃあ寝てる

「フン」

……よつしーの喋り方が、違う。普通の男の子っぽい!

「佐藤さん、どうぞ」

席に着くよう促すよつしー。

「フーン、あなたが佐藤さん? 災難ねー、よつすいーに捕まるなんて

「え? はは……」

うーん、慣れるのに時間掛かりそつ、この子。

「こつちは木原みゆき。んー、友達です」

「佐藤、明子です。初めてまして」

「よひしー。ねえねえ、あきちゃんんでさあ、高校生だったんでしょ?」

あ、あきちゃん?

「彼氏居なかつたの?」

「いきなりそんな質問するな。明子さんに失礼だろ」

「あきちゃん十七だつて? 私、十三なんだ」

「へー、そうなんだ」

しまった！ よつしーが私を明子つて呼んだのに突つ込むきつかけが持つてかれた！

「いつもよつすいーと一緒にいるでしょ？ デジがいいの？ こんな」

いや、いいとも何とも言つてないけど……。確かに一緒に居る。だつて、帰る場所だつて無いし……。そういえば、一十四時間ずっとだ……。これは、そうなるよね、普通。

「普通、私達みたいな若い女の子は、よつすいーみたいなの相手にしないんだからね。よつすいーは感謝しなさいよ」

「……わかつてますわかつてますよ」

「……はは、てつ生きり木原さんが杉田君の彼女なのかと思つてたけど、違うの？」

「杉田君で、何ですか！ 今まで『よつしー』だったのに…」

「何ででしょうねー」

勝手に名前で呼んだ罰なんだから。

「あきちゃん、よつすいーの歳、聞いたことあるの？ 彼女なんてありえないって」

「え？ 歳……十五、だよね？」

「みゆきー、もう止めろー、もう十分だ！ 佐藤さん、そろそろ行きましたよ。ちょっと紹介したかつただけですから」

「フ、よつすいー、会わせといて私が何も喋らないとでも？ あきちゃん、よつすいーはねえ、十五歳だけ……」

「何？ 十五歳だけど？ 思わず身を乗り出す私。

「最後の誕生日が来たのは、二十年前でしたあー。へ、うはははははははは」

。

「佐藤さんー、僕は十五なんですつてー、いやホント。歳、取らないんですからー！」

「でね、体が無くなつて便利になつちやつたもんだから、何したと

思う？」「

「み、みゆきつ！ 黙れつ！」

よつしー本氣で木原さんの口を塞ぎに掛かる。……余程後ろめたい事の様ね……。

「十五歳は」

「色々おー

木原さんの口は、レジスタンスの猛攻をぐぐり抜けて、確實に、情報吐き出す。

「街中の若つ」

「女

「裸をつ！ 全

「覗

……私は静かに立ち上がる。よつしーの体が固まるのが見えた。  
「いくらなんでも、いかんよね～これは。若気の至りとはいえ、うん。いかんよ、三十五歳独身」

彼女は戦いを終えて休息のジューース。

「独身は当たり前だろう！ 僕は十五だつ」

「……私、今日はもう帰るわ」

「さ、佐藤さん、あの、はるか昔の……」

「さよなら。変態親父の杉田さん」

私はこつこりと微笑んで。

喫茶店を出る。ああ、今日も空気が美味しい……街がキラキラしてゐる。今日は何しようかなあ。

「佐藤さん！ 佐藤さああん！」

この叫び声を聞いてから丸々四十八時間、私はよつしーとは口を聞いてやらなかつた。短い？ あなた、四十八時間がどれだけ長いか知つてる？ 表に四十八時間立つてみるといい。勿論立つたまま寝るなんて論外だからね。私がもし、よつしーを罰として立たせらなら、そうね、数万時間でも足りない。だつて彼、そんなの全然堪

えないんだもん。私の気が済むまで、つて事。  
待ってる私も退屈だから、私の方が先に話したくなつて、一緒に  
どこか行きたくなるつて訳よ。

完

## あとがき

現在、投稿連載中の「流浪一天」という武侠小説が私の初めての作品なんですが、そちらを目にした事のある方は、この「無辺の鳥かご」を読まれて、『ああ、ムシャクシャしてやつたんだな』と感じておられるのではないかと思います。確かにそんな感覚もありますし、武侠小説では表現も堅くなりますが、ちょっと弾けたい、みたいな気になつた訳です。ですので、かなり勝手し放題な文章を短時間で書きなぐつたというのが本当の所です。

物語は「え？ これからじゃないの？」と自分でも思つたりしますが、ひとまず終わりです。ですが、いざれまた時間が取れれば続きを書きたいと考えています。今回のように衝動的に書くか否かはまだ定かではないのですが、何とか形にして、また読んで頂く事が出来ればと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5311d/>

---

無辺の鳥かごで

2010年10月10日18時14分発行